聖ヨハネ・パウロ II 世

詩編について

第一巻

・祈りの源である詩編 1, 2

・ 第 1 週 朝の祈り

	日	月	火	水	木	金	土
第 1 唱和	詩編 63		詩編 24	詩編 36	詩編 57	詩編 51	
第 2 唱和	ダニエル 34	歴代 29		ユディト 16	エレミア 31	イザヤ 45	出エジプト
第 3 唱和	詩編 149	詩編 29	詩編 33	詩編 47	詩編 48	詩編 100	詩編 117

祈りの源である詩編１

1,使徒的書簡「新千年期の初めに」で､神である主から新たに祈り方を習い、教会が「祈る術」という点できわだつように、という希望を示しました（32 参照)。祈る術を身に付ける努力は、とりわけ典礼に注がれなければなりません。典礼は教会生命の源であり頂点です。それゆえ、神の民の祈りである時課の祈り（教会の祈り）を促すよう、更なる司牧的配慮が払われることが重要です（同上 34 参照)。司祭や聖職者に時課の祈りを唱えるという指示が与えられているのですから、信徒も同じ祈りを唱えるようにと熱心に勧めるのは当然なことです。これは尊敬すべき前教皇パウロ六世が目指したことでした。約 30 年前、文書「ウディス・カンティクム」で時課の祈りの現在の形が決定されました。時課の祈りの本質的構造である詩編と賛歌が、「神の民によって新たな感謝をもって」理解されるよう望んでのことです。(AAS63〔1971〕，532)

多くの信徒が、教区や教会組織の中で時課の祈りを正しく理解するようになっていることに励まされます。とはいえ、この祈りを完全に理解するためには、要理や聖書の適切な形成が、依然として前提条件となります。

今日は、時課の朝の祈りにある詩編と賛歌についての要理講話を始めます。この要理講話によって、皆さんが、キリストが使った同じ言葉で祈るよう励まされ促されることを望んでいます。キリストが使われた言葉は、何千年間もイスラエルと教会の祈りの主な部分でした。

2,詩編を理解するために様々な方法があるでしょう。初めにすべきなのは文の構造、著者、形式、詩編が成り立っている状況を示すことです。その詩的な特徴を重視して読んでみるのも効果的でしょう。詩編は時に最高の叙情詩的洞察力、象徴的表現に到達するものです。詩編を繰り返し読み、示される人間の心の様々な感情を考察することも同様に興味深いことです。喜び、感謝の意と感謝の言葉、愛、優しさ、熱心、また怒りやのろいにつながることもある激しい苦しみ、訴え、助けや正義への懇願です。詩編の中で、人間は完全に自己を発見するのです。

私たちが詩編を読むのは、詩編の宗教的意味に向かうことが特に目的となります。詩編は何世紀も前にヘブライ人のために書かれたものですが、キリストの弟子がそれをどのように祈りとして用いることができるかを見出すことが目的なのです。そのためには聖書解釈の結果に頼ることになるでしょうが、聖伝から学び、特に教会の教父たちに耳を傾けることにしましょう。

3,教父たちは深い霊的洞察カによって偉大な「鍵」を見分け確認することが出来ました。それは、詩編が、神秘の充満であるキリストご自身であると理解することです。教父たちは、詩編がキリストのことを語っていると強く確信していました。実際、復活したキリストは、詩編をご自身に当てはめ、弟子たちにこう言われます。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する」(ルカ 24:44)。教父たちが付け加えることは、詩編がキリストについて語っていること、そして、お話しになるのもキリストご自身であるということです。そうすることで、教父たちは、キリストご自身だけではなく、全体としてのキリスト、つまり頭であるキリストとその構成員からなる全キリストについても考えているのです。

キリスト者はこうしてキリストの全神秘の光に包まれ、詩編の書を読むことができました。同じような見方は教会的側面にももたらされ、詩編が合唱される時、それは特に

強調されます。このことから、神の民の祈りとして、初めの数世紀から詩編がどのように採用されてきたか理解することができるのです。ある時代に他の祈りが好まれる傾向があったものの、教会の頭上に詩編のたいまつをかかげだのは修道士たちの功績です。その一人はカマルドリ会の創立者 聖ロムアルドです。伝記の著者ブルーノ・クエルフルートが記しているように、聖ロムアルドは二千年期が始まる時、詩編は本当に深い祈りを経験するための唯一の方法である(Una via in psalmis.)と述べました (Passio sanctorum Benedicti et Johannis ac sociorum eurundem:MPH VI,q893,427)。

4,最初は極端に思えるこの断言とともに、聖ロムアルドは初代キリスト教の最高の伝統をつなぎとめ、それによって詩編が教会の祈りの特に優れた書となりました。その行為は、信仰と交わりを絶えず脅かす異端的傾向を考慮した勝利の選択でした。このことに関して興味深いのは、聖アタナシウスがマルセリヌスに書いたすばらしい手紙です。それは4世紀の中ごろアリウス派がキリストの神性を激しく攻撃していた頃に書かれました。宗教的感情を満足させる賛歌や祈りで人々を誘惑する異端と戦うために、教会の偉大な教父は、聖書に残された詩編を教えることに全精力を注ぎました (PG27,12ff 参照)。

こうしてまもなく、いわゆる主の祈りに加えて、詩編を唱える祈りが信者の間で普遍的なものとなったのです。

5,共同体として詩編を祈ることで、キリスト者の心が思い出し理解したことは、地上に住む兄弟姉妹との熱烈に一致した生活がなければ、天国におられる御父に向かうことはできないということです。さらに、ヘブライの伝統的な祈りに本気で没頭することによって、キリスト者は「神の偉大なみわざ」を繰り返しながら祈るようになりました。つまり、世界と人類の創造、イスラエルと教会の歴史において、神がなさったことを思いつつ祈るようになったのです。聖書から出されたこのような祈りの形は、個人的祈りを特徴付け、典礼の祈りを豊かにする自由な賛歌や修辞語句といった表現を排除するわけではありません。しかし、詩編の書はキリスト者の祈りの理想的な源を残し、新千年期の教会を鼓舞し続けることでしよう。

祈りの源である詩編2

1,詩編と賛歌についての解説を始める前に、前回の要理講話で触れた序論部分を完結させたいと思います。霊的伝承の愛すべき側面の動きをつかみ、考察して行きましょう。詩編を歌うと、キリスト者は聖書に現存する聖霊、そして洗礼の恵みによって自分の中に住まわれる聖霊との一致のようなものを体験します。自分の言葉で祈る時より詩編の言葉で祈るほうが、聖パウロの言う「言葉に表せないうめき」(ローマ 8:26) を自分の中で反響させることになります。「言葉に表せないうめき」で、主の聖霊は信じる者をイエズスの祈り「アッバ、父よ」と一致させるのです。

古代の修道士たちはこれを確信していましたから、母国語で詩編を歌うことを恐れません。自分たちが何らかの形で聖霊の「器官」であることを知るだけで十分でした。自分たちの信仰によって、聖霊の並外れた「エネルギー」が詩編の章句から飛び出すことを確信していたのです。同じ確信は、詩編の祈りを「射祷として」使う時も同じでした。

「射梼」とはラテン語の「イアクルム」（投げ矢）から来たものです。詩編の短い数節を使う射梼は真っ赤に燃えた矢先のように、誘惑に対して投げつけられます。4〜5 世紀の人であるヨハネ・カシアノは、ある修道士が詩編 69 の最初の数節の大変な効力を発見したことについて述べています。「神よ、わたしを力づけ、急いで助けに来てください。」この言葉はその頃から時課の祈り（教会の祈り）の導入部のようになっていたのでした（Collationes10,10:CPL512,298ss 参照）。

2,聖霊の現存と共にもう一つの大切な側面は司祭的行為の現存ですが、それは配偶者である教会とご自分を結びつけるキリストの祈りの中で発展させられたものです。このような関係をもとに、第２バチカン公会議は時課の祈りにはっきりと触れ、次のように教えています。「新しい、永遠の契約の最高司祭、キリスト・イエズスは、人間性をとり、天上で永遠に歌われている賛歌を、この追放の地にもたらした。（･･･）実に、キリストは、司牧職を自分の教会を通して継続している。この教会は、聖体祭儀だけでなく、他の方法、特に聖務日課（時課の祈り）を果たすことによって、主を絶え間なく賛美し、全世界の救いのために代願している。」（「典礼憲章」83）

従って、時課の祈りには公的な祈りという特徴もあり、また教会は特に時課の祈りと結び付いています。時課の祈りは、１日に何度か行われる祈りを教会がまとめたものですが、それがどのように決められていったかもう一度考えるのはすばらしいことです。このことを考えるためには、まず初代キリスト教共同体に立ち戻る必要があります。当時、キリスト者の祈りとモーセの掟に基づく律法の祈りはまだ強く結びついていました。律法の祈りは、エルサレムの神殿で１日の決められた時間に行われていたものです。使徒言行録には、使徒たちが「心を一つにして神殿に参」ったこと（2:46）、「午後三時の祈りの時に神殿に上って行った」（3:1）ことが書かれてあります。さらに、特にすぐれた「律法の祈り」が朝と夕方に行われたことも記されてあります。

3,一日の特定の時間、また一週間一年の決まった日のために、イエズスの弟子たちは詩編の中から特に適した箇所を徐々に選び出していきました。こうしてキリストの秘儀と結びついた詩編の深い意味を理解したのです。聖チプリアノは次のように書き記しています。「主のあがないを祝う祈りを一日の初めに朝の祈りで行うのは本当に必要なことです。主の復活を一日の初めに祝うことは、かつて聖霊が詩編で示した言葉と一致しています。『わたしの王、わたしの神、あなたに祈る　この叫びを聞いてください。神よ、朝ごとに　あなたは　わたしの祈りを聞き、わたしは心をととのえて　あなたを待ち望む』（詩編 5:3-4）。太陽が昇り、一日が始まろうとしているとき、もう一度祈る必要があります。キリストは実際に本物の太陽、本物の昼なのですから、太陽と世の終わりの瞬間に祈り、光が私たちの上に戻るよう願いながら、キリストが永遠の光の恩恵をもたらしてくださるよう祈るのです」（「主の祈りについて」35:PL39,655）

4,キリスト教の伝統は、ユダヤ教の祈りを永続させるだけではありません。むしろ、ある種の刷新を行った結果、イエズスの弟子たちの祈りの全体験にさらなる特徴を加えることとなったのです。こうして、朝と夕方の主の祈りに加えて、キリスト者は日々の祈りを祝うための詩編を自由に取り入れます。詩編を導入する中で、教義上特に大切な時に特定の詩編を使うことが提案されました。その中でも、復活のあがないが祝われる主の日の日曜日を準備する徹夜祭の祈りが重要です。

典型的なキリスト教の特徴が、後に三位の栄唱から加えられました。詩編と賛歌の終

わりには、「栄光は、父と子と聖霊に」が加えられることになったのです。こうしてすべての詩編と賛歌は神の充満によって照らされています。

5,キリスト教の祈りは最高の信仰の出来事であるキリストの過ぎ越しの秘義を中心に生まれ、育てられ、発展します。こうして朝と夕方、日の出と日没時に、そして復活祭で、キリストの死から命への過ぎ越し、つまり復活が思い出されるのです。そのため、夕べの祈りの灯に現れるキリストを象徴する「世の光」は天窓とも呼ばれました。昼間の時間は順に主の苦しみの話を思い起こさせます。そして第三時課は聖霊降臨を思い出させます。最後に、終末論的特徴のある夜の祈りは、ご自分の帰還を待つ間行うようにとイエズスがお勧めになる徹夜の祈りを呼び起こします（マルコ 13:35～37)。

それゆえキリスト者は、祈りのリズムを保つことで、「絶えず祈れ」という主のご命令に応えたのでした（ルカ 18:1,21:36, 1テトス 5:17,エフェソ 6:1 参照)。しかし、生活全体を何らかの形で祈りとすることを忘れていたわけではありません。オリゲネスはこの点に関して次のように述べています。「彼（キリスト）は絶えず祈り、祈りと仕事、仕事と祈りを一つにする。」(On Prayer,XII,2:PG11、452C)

詩編の朗唱という自然な習慣の成り立ちは、以上のようなものです。耳を傾けこのように生きるならば、キリストを信じる者は詩編をかざる三位一体の栄唱によって、聖霊の波に絶えず乗り、神の民全体と一致して、絶えず命と平和の海に突き進むことになります。洗礼において生命と平和の海に入る、すなわち父と子と聖霊の秘義に浸されるのです。

第１週　日曜日　朝課　第１唱和

詩編 63

1,今日、私たちが黙想する詩編 63 は、ほとんど肉体的といえそうなほどの憧れと親密で永遠の抱擁の内にその充満に到達すること基づく、神とのまったき一致を祝う、神秘的な愛についての詩編です。祈りは、体と魂の双方を巻き込むものですから、それは憧れ、乾き、飢えとなるのです。

アビラの聖テレジアは次のように書いています。「乾く、このことは、私たちに必要不可欠な何かへの憧れを意味しているのだと思います。あまりにもそれを必要としているので、それなしには私たちは死ぬほかないような何かへの…。(『完徳の道』XIX 章)。」典礼は、実際の乾きと飢えというシンボルに焦点を当てているこの詩編の最初の２つの節を私たちに差し出しています。この詩編の第３節では、よこしまなものへの神の裁きという暗い地平線を心に呼びさましながら、残りの部分で光と信頼に満ちた憧れをこれに対立させています。

2,神への乾きについてとりあつかう最初の歌(詩編 63:2-4 参照)の黙想を始めましょう。夜明け、聖地の澄み切った青い空に陽が昇ろうとしています。ここで祈っている人物は、神の光を求めて神殿に詣でることで自分の一日を始めます。彼には、「肉体的な」必要性と言えるほどに主との出会いを求める、本能と言えそうなものがあります。ちょ

うど、雨によって潤されるまでは死んだものである乾ききった大地のようであり、大地に口をあけたひび割れは乾燥して乾いた口のイメージを示しています。この信じる人は、これほどまでに神を憧れ、神に満たされて神との交わりの内に生きることを憧れているのです。

預言者エレミアは、すでに宣言しています。主は「生きる水の源」であり、「水をためることのできない水ため」を掘ったことについて、民を咎めておられる、と(エレミア 2:13 参照)。イエズス御自身、大声で叫んで言われました。「乾く者はだれでも、私のもとに来なさい。私を信じる者に飲ませよう」(ヨハネ 7:37-38)。良く晴れた静かな真昼時、イエズスはサマリアの婦人に約束なさいました。「私が与える水を飲む者は、もはや決して乾くことはない。私が与える水は、その人の中で永遠の命の湧き出る泉となる」(ヨハネ 4:14)。

3, 詩編 63 の祈りには、あの素晴らしい詩編 43 の歌が織り込まれています。「谷川の水を求めてあえぎさまよう しかのように、神よ、わたし(の心)はあなたを慕う。…あなたを仰ぎみられる日はいつか」(詩編 43:2-3)。旧約のヘブライ語の「心」にあたるのは「nefesh」という語で、いくつかの文章では、「喉」を意味しており、他の多くの箇所ではその意味が拡大されて、全人格を指し示しています。このような次元から捕えるなら、この言葉は、神に対する私たちの必要性がどれほど本質的で意味深いものであるかを認識するために私たちを助けてくれます。神なしには、呼吸も、命自体さえも失うことになるのです。この理由から、この詩編は、もし、神との一致が欠けているなら、肉体的な存在自体を次の段階へと推し進めるようにと指示します。「あなたの恵みはいのちに勝り…」(詩編 63:3)。詩編 73 では、祈っている人は、主に向かって繰り返すことになります。「あなたのほかに天にだれ持ちえよう。地上ではあなたのほかによろこびはない。わたしの心と体は思いこがれる。神はとこしえにわたしのささえ、わたしのいのち。…神の近くにいるわたしはしあわせ」(詩編 73:25-28)。

4, 乾きについての歌の後、詩編作者は飢えについての歌を歌います(詩編 63:5-8)。「もてなしを受けた時のように、わたしの心は豊かになり」満たされるというイメージによって、祈っている人は、おそらく、シオンの神殿で祝われていた生贄のひとつについて言及しています。いわゆる「交わりの」生贄は、信者たちが生贄の肉を食べる聖なる宴です。ここでは、命のためのもう一つの基本的な必要性が、神との交わりの象徴として用いられています。人々が神のみ言葉を聞き、主と出会う時に、飢えはおさまるのです。本当に、「人はパンだけで生きるのではない。かえって、…神の口からでるすべてのものによって生きる」(申命記 8:3, マタイ 4:4)のです。また、ここでは、キリスト者の思いの中を、キリストがこの地上におけるご生涯の最後の晩に準備してくださった宴についての思いがよぎります。その深い価値について、主はカファルナウムでの対話の中で次のように説明なさいました。「私の肉はまことの食べ物、私の血はまことの飲み物である。私の肉を食べ私の血を飲むものは、私の内に留まり、私もその人の内に留まる」(ヨハネ 6:55-56)。

5, 神秘的な食物による神との交わりを通して、詩編作者が言及している通り、「わたしの心はあなたにたより」ます。再び、「心(nefesh)」という言葉は全人格を指し示します。ここで、人はまさに、抱擁、ほとんど身体的にしがみつくような状態についての

言及を見出します。神と人とは完全な交わりの内にあり、神の被造物の唇には、ただ喜びと感謝に満ちた賛美が花咲くのです。暗い夜の間でさえ、あたかもケルビムの翼によって覆われている契約の櫃のように、私たちは神の翼によって守られていると感じます。このようにして、忘我の境に至った喜びの表現が花咲くのです。「あなたの翼の影にわたしは隠れる」。恐れは打ち払われ、虚無にしがみつくのではなく、神御自身を抱擁し、私たちの魂は神の右の御手の力によって抱き上げられるのです(詩編 63:7-8 参照)。

6, 復活の神秘の光の内にこの詩編を読みながら、私たちを神へと押し進めてくれる飢えと乾きは、十字架に釘付けにされ、復活なさったキリストの内にその充満を見出すのです。私たちは、この御方から、新しい命と命を支える栄養を与えてくれる秘跡をいただくのです。

聖ヨハネ・クリゾストモは、ヨハネ福音書講話の中で次のことを私たちに思い起こさせてくれます。主のわき腹から「流れ出た血と水(ヨハネ 19:34 参照)」について、「この血と水の中に洗礼と(御聖体)の神秘が象徴されています。」そして、聖ヨハネ・クリゾストモは次のように締めくくっています「キリストが御自分の花嫁と御自身とをどのように一致させられたかをご覧になりましたか? 私たちは、この同じ食物によって、形作っていただき、養っていただいているのです。女性が自分の血とミルクとで自分の子どもを養うように、キリストもまた、御自分の御血によってもうけた人々を自ら養い続けておられるのです」(洗礼志願者への説教 III, 16-19)。

第 1 週　日曜日　朝課　第 2 唱和

ダニエル書補遺 34

1, 「造られたものはみな神を賛美し･･･ほめたたえよ。」(ダニエル書補遺 34) 無限の大きさが、ダニエルの書の賛歌を満たします。これは、第 1、第 3 日曜日の賛歌として唱えるよう時課の祈りが勧めるものです。このすばらしい連祷のような祈りは、主の日にふさわしく、復活したキリストの黙想を促します。主の復活は、宇宙と歴史に対する神のご計画の頂点でした。確かにキリストにおいて、アルファでありオメガ、歴史の最初の者であり最後のものであるキリストに (黙示録 22:13)、創造の完全な意味があります。ヨハネが福音書の序章で記す通りです。「万物はみ言葉によって成った」(ヨハネ 1:3)。救いの歴史はキリストの復活で頂点に達します。そして、人間の生命が聖霊の賜物に開かれ、私たちは神の養子となりました。同時に、神である御父に国を引き渡す神的な花婿の再来を待つのです (I コリント 15:24 参照)。

2, 連祷の形をとるダニエル書補遺を読むと、あらゆるものを次々と回想するかのようです。陽、月、星を見つめ、果てしなく広がる海、次には山、そして季節の様々な移り変わりにひたります。暑さ寒さ、光と暗闇、鉱物や植物界、動物たちのことも思い巡らします。それからこの叫びは普遍的なものとなり、神の天使に触れ、全人類にたどり着き、特に神の民イスラエル、司祭、聖人らが強調されます。これは終わりない賛歌、神、宇宙の創造主、歴史の主を賛美するため、様々な声で成るシンフォニーです。三位の神を告げるキリストの啓示の光に照らされて祈るとき、典礼に従う祈りに招かれることで

しょう。「賛美は父と子と聖霊に」。典礼はこの祈りをダニエルの賛歌に加えます。

3, この賛歌は、人間の宗教心を示すものとも言えます。人間の宗教心は、世界に見られる神のしるしを感じ取り、創造主に思いを巡らす所まで高められるものです。しかしながら、ダニエル書補遺の賛歌は、三人の若者が感謝を示すために歌われます。三人の若者、アナニア、アサリア、ミカエルは、金の像ネブカドネツァルへの崇拝を拒んだために、かまどで火刑に処せられた者たちでした。しかし奇跡的に三人は炎から守られます。この出来事の背景と対応するのが、救いの歴史という特別な計画です。この救いの歴史の中で、神はイスラエルをご自分の民とし、契約を取り交わされます。この契約は、三人の若いイスラエル人と交わされる契約と同じものです。三人は、燃えるかまどでの殉教の危機においてさえ神に忠実であることを願いました。三人はその忠実によって、神の忠実を体験することになります。神は三人にかまどの火を近づけぬよう天使を送られました（ダニエル 2 章参照）。

こうして、旧約聖書における危険回避を称賛する歌に基づいて賛歌が形作られました。その他にも勝利を祝う歌で良く知られたものがあります。その一つは、出エジプトの 15 章に見られるものですが、それは古代ヘブライ人がエジプトの軍隊から逃れた夜、主に感謝を表わすものです。その夜、神の助けがなければ、後を追うエジプト軍に間違いなく追いつかれるはずでした。神はエジプト人に道を開かず、「馬と乗り手を海に」（出エジプト 15・1）投げ込みます。

4, 典礼上、毎年復活徴夜祭で、出エジプトのイスラエル人が歌う賛歌を繰り返すことになっていますが、それは偶然ではありません。イスラエル人に開かれた道が預言的に示しているのは、キリストが死から復活した夜、人間のために開く新しい道についてです。象徴としての洗礼の水を受けることで、死から命への道を追体験することができるのです。それは、全人類のために死に打ち勝ったイエズスの勝利のおかげです。日曜日の典礼の賛歌で、三人の若いイスラエル人の賛歌を繰り返すことによって、私たちキリストの弟子は、創造や、とりわけキリストの死と復活の神秘といった神の偉大な業に対して、三人と同じ感謝の心を表わします。

事実キリスト者は、賛歌で示される三人の若者の解放とイエズスの復活との関係について気が付きます。イエスの復活について使徒言行録では、神を信じる者に与えられた祈りを洞察しています。詩編作者のように信頼して歌う人々が唱える祈りです。「あなたはわたしを死の国に見捨てられず、あなたを敬う者が朽ち果てるのを望まれない」（使徒言行録 2:27、詩編 16:10）。

伝統的に、三人の若者の賛歌とイエズスの復活は関連づけられてきました。ある古代の記録には、主の日の祈りにこの賛歌が唱えられたと記されています。主の日は、キリスト者にとって週に一度の復活祭でもあります。さらに、三人の若者が炎の真只中で無傷のまま祈る姿を描いた絵画がローマのカタコンベで見つかっています。それは、祈りの効果を示すもので、神が取りなしてくださるという確信を証ししています。

5, 「高い大空の中であなたは賛美され、すべてにまさり、世々にほめたたえられる」（ダニエル書補遺 33）。日曜日のこの賛歌を唱えると、キリスト者は感謝を感じます。この感謝の気持ちは創造の賜物のためだけでなく、神から父としての配慮を受けることから来るものでもあります。神は、キリストを通して、私たちを子供という尊厳にまで高めてくださいました。

神の父親としての配慮によって、新しい見方で創造を眺めることができるようになります。また驚くべき美は気品あるしるしを示しています。私たちはそのしるしの中に神の愛を垣間見ることができるのです。アッシジのフランシスコはこのような心で創造を黙想し、美の源である神を称賛しました。フランシスコは、サン・ダミアノで、肉体的精神的苦しみの極みを経験しましたが、聖書のこの祈りが魂にこだまし、「太陽の歌」を作ったのは、その後だったと考えられています。(Fonti Francescane, 263 参照)

第 1 週　日曜日　朝課　第 3 唱和

詩編 149

1,「新しい歌を神に歌い、民のつどいで神を賛美しよう」。ただ今、詩編 149 の中で私たちが聞いたこの命令は、明け染めていく夜明けを指し示し、朝の賛美を歌うようにと信じる者を整えてくれます。この示唆に富む一節によって、彼らの賛美の歌は「新しい歌」(詩編 149:1)と定義づけられています。荘厳で完全な賛美歌、主が刷新された世界において、義人たちを呼び集める最後の日々のために完成された賛美の歌です。この詩編全体に祝いの雰囲気がみなぎっています。まず冒頭のアレルヤに始まって、合唱、賛美、喜び、踊り、太鼓と竪琴の音色へと続きます。この詩編は、宗教的高揚に満たされた心から溢れる感謝の祈りに霊感を与えています。

2,ヘブライ語原文において、この詩編の主人公たちは、旧約聖書の霊性からとられた 2 つの主題を与えられています。最初のテーマとして、3 度にわたって、これらの主人公たちは「hasidim(詩編 149:1,5,9)」すなわち、主の父としての愛に忠実さと愛(hesed)をもって応えた人々、「神を敬う人」と定義付けられています。

この詩編の第 2 部は、驚きを引き起こします。戦いの感情に満ちているからです。同じ節の中で、「かれらの口には神への賛美」と「手には鋭い剣がある」が一緒に置かれています(詩編 149:6)。このことを考察することによって、私たちは、何故この詩編が、解放のための戦いに巻き込まれた「信じる人」が使用するために造られたのかを理解することができます。彼らは、虐げられている民を解放し、神に奉仕する可能性を与えるために戦っているのです。紀元前 2 世紀、マカバイの時代、ギリシアの権力者からの過酷な圧政を受けていた人々の、自由と信仰のための戦いは、「hesidim」すなわち神のみ言葉と先祖たちの習慣に忠実な人々のものとして意義付けられていました。

3,この祈りが差し出している視野において、戦いという象徴は、朝、神に向かって賛美を歌ってから、この世の様々な道へと、悪と不正ただ中へと、出かけていく信仰者たちの奉献のイメージとなります。不幸にも、さまざまな悪の力が神の国に対して隊列をなしているのです。詩編作者は「諸民族、諸国の王や諸侯」について語っています。しかし、彼は、歴史の主導権を握っておられる方である主が自分のそばにおられることを知っているので、確信に満ちています(詩編 149:2 参照)。悪に対する彼の勝利は確実であり、愛が勝利をおさめることになっているのです。すべての「hesidim」はこの戦いに参与し、彼らは、聖霊の力によって、神の国と呼ばれる素晴らしいみ業に完成をもた

らす忠実で正しい人々となるのです。
聖アウグスチヌスは、この詩編の「民のつどい」と「鼓と琴」に言及することから初めて、次のように質問しています。「民のつどいが表しているのは何でしょうか?…民のつどいとは、一緒に歌うために集まっている歌い手のグループ聖歌隊のことです。私たちが聖歌隊で歌う場合、私たちは調和良く歌わなければなりません。ある人が聖歌隊の中で歌う時、その人が調子はずれな声を出せば、聴衆を悩ませ、聖歌隊の中に混乱を作り出してしまいます」(詩編 149 解説,CCL40,7,1-4)。
この詩編を考察しながら、楽器について言及して、彼は次のように質問しています。「何故、この詩編作者は鼓と琴を手に持っているのでしょうか?」彼は答えます。「なぜなら、私たちは声だけで神を賛美するのではなく、私たちの働きによっても神を賛美するからです。私たちが鼓と琴を使う時、両手は声に従わなければなりません。私たちについても、同じことが言えます。私たちがアレルヤと歌う時、私たちは貧しい人々にパンを与え、裸の人に服を着せ、旅人に宿を与えなければなりません。皆さんがそのように行動するなら、皆さんは声で歌っているだけでなく、両手が皆さんの声に従っているのです。なぜなら、業というものは言葉に同意してなされるものだからです(同上 8,1-4)。
5,この詩編の中で祈っている人々を定義付けるために用いる第2のテーマは次のようなものです。彼らは「anawim」すなわち「貧しい人」(詩編 149:4)です。この表現は、詩編の中でたびたび取り上げられています。単に虐げられた者、惨めな者、正義のために迫害されている者をさしているのではなく、神と契約を結んだ者として倫理的教えに対する忠実さを持っており、暴力や富や権力を優先する人々によって周辺に追いやられている人々を指し示しています。この光のもとで、「貧しい人」という分類は単なる社会的な分類ではなく、霊的な選択による分類であることが理解されます。真福八端の最初の幸いが意味しているのは、このことです。「霊において貧しい人は幸いである。天の国はその人たちのものであるから」(マタイ 5:3)。預言者ゼカリアは、特別な人々としての「anawim」に向かって次のように語りかけています。「主を捜し求めよ、主の掟を守り、義を求め、へりくだることを求める地のすべてのへりくだる者たちよ。おそらく、主の怒りの日にお前たちは隠されることだろう」(ゼカリア 2:3)。
[主の日とは主が悪に打ち勝たれる日]
6,「主の怒りの日」とは、実際、この詩編の第 2 部において、「貧しい人」が悪に対して戦いを挑むために神のそばに隊列をなす時として描写されている日のことです。彼ら自身によっては十分な力も武器も悪の猛攻撃に抵抗する戦略も持っていません。しかし、詩編作者はためらってはいません。「神はその民を心に留め、貧しい人を勝利で飾られる」(詩編 149:4)。コリントの人々に向かって聖パウロが行っていることは、この描写を完成してくれます。「神は、世にある者たちを無とするために、いやしい者、世から疎んじられている者、無にすぎない者をお選びになった」(I コリント 1:28)。
このような確信によって、「シオンの子ら」(詩編 149:2)である hesidim と anawim、すなわち信じる人や貧しい人は、この世の中と歴史の中で、自分たちの証しを生き抜くために出かけて行きます。ルカ福音書の中にあるマリアの賛歌、マニフィカトは、「シオンの子ら」の心情を最も良くこだましています。すなわち、彼女の救い主である神への荘厳な賛美、力ある方によってなされた偉大なことがらへの感謝、悪の力に対する戦

い、貧しい人々との連帯、契約の神に対する忠実(ルカ 1:46-55 参照)。

第 1 週　月曜日　朝課　第 2 唱和

歴代上 29

1,「神よ、わたしたちの先祖イスラエルの神よ、あなたは代々にたたえられる」(歴代誌上 29:10)。この熱のこもった称賛の賛歌は、歴代誌上巻にダビデの言葉として記されていますが、突然ほとばしる喜びを私たちの記憶によみがえらせます。最初の契約の共同体は神殿建設の準備に喜んで応じ、神殿は王や王に寛大に貢献した多くの人々の努力の実りとなりました。人々は事実、寛大に戦いました。「人のためではなく、神なる主のための」(歴代誌上 29・1) 住まいとして求められたからです。

数世紀後、歴代誌作者はこの出来事を読み直し、ダビデとその民の気持ち、つまり喜びと貢献した人々への感嘆を直感で感じ取ります。「民は彼らが自ら進んでささげたことを喜んだ。彼らが全き心をもって自ら進んで主にささげたからである。ダビデ王も大いに喜んだ。」(歴代誌上 29・9)

2, 以上が、この賛歌が生まれた背景です。この賛歌は、人間の満足については簡単に触れるのみで、神の栄光に直接注意を引かせることがその中心です。「神よ、あなたは偉大…国はあなたのもの…」。しかし神のために仕事を成す時、大きな誘惑が常に潜んでいます。神の方が私たちに負い目があるかのように自己を中心に持ってくるという誘惑です。それとは違い、ダビデは全ては神のおかげであると考えていました。知性と力で全てを行った最初の創造者は人間ではなく神ご自身なのです。

こうしてダビデは、全ては神の恵みであるという真理を表わします。神殿のためにわきへ置かれたものは、ある意味では、単なるお返しにすぎません。神によって作られた御父との契約というはかりしれない賜物に対する取るに足りないお返しです。このようにダビデは、軍隊や政治的経済的分野での自分の財産がすべて神のおかげだと理解していました。すべては神から来るのです。

この賛歌の作者は神の偉大さと力を告白するために十分な言葉を持っていなかったように思えます。作者は、神がイスラエルにお示しになった特別な父性から、神をまず初めに「私たちの父」と考えます。これは最初の表題で、その後に「今と永遠に」という称賛が続きます。

この祈りをキリスト教的に使うと、神の父性が神の御子の御託身に完全に示されていることが思い出されます。神に愛情をもって「アッバ (父よ)」と呼びかけるのにふさわしいのは御子だけです (マルコ 14:36 参照)。しかし私たちは聖霊の賜物のおかけで、御子と御父の親子関係にあずかり、「御子における子供」になります。父である神の古代イスラエルへの祝福は、神を「私たちの父」と呼ぶという さらなる熱意をもたらしますが、それはイエズスが示され教えられたことです。

4, この賛歌の作者の視野は、救いの歴史から全宇宙に広がり、創造主である神を黙想します。「天にあるもの、地にあるものは、みな、あなたのもの」「国はあなたのもの、あなたはすべての上に立つかた」。詩編 8 にあるように賛歌を祈る者は天国の無限の広がりに頭を上げ、広大な地上を驚き眺め、あらゆるものが創造主の支配下にあることを

理解します。一体どうやって神の栄光を表現することができるでしょうか。神秘を追及して言葉を積み上げるように、偉大さ、強さ、栄光、権威、卓越、また力や支配力といった言葉を連ねます。人間が体験するあらゆる美しさ偉大さは、全ての源、それを支配する方からのものと考えるべきです。所有する全てのものは、神の賜物であると人間は知っています。ダビデはこの賛歌の中でさらに強調します。「このような寄進ができるとしても、わたしなど果たして何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません。」（歴代誌上 29:14）

5, 神の賜物であるという事実の背景によって、私たちは称賛と感謝という賛歌の断片を「奉献」という確かな精神と結びつけることができます。奉献の精神は、キリスト教の典礼が、特に御聖体の祝いにおいて私たちを生かすものです。それは、司祭がパンとぶどう酒をキリストの御体と御血に変える時に唱える二つの祈りに現れます。「あなたの善を通して、私たちはこのパンを受けました。このパンは地上と人間の仕事の実りです。私たちはこれが永遠の命のパンとなるようあなたに示します,」（奉納の祈りを自由に訳したもの）この祈りはぶどう酒に対しても繰り返されます。また同じような箇所がビザンチンの神聖な典礼や古代のローマ奉献文にも見られます。両者とも、御聖体の記念唱の中で、神の賜物として受けた物を差し出す意向を表わすために用いています。

6, 最後に、神についてのこのような見方は、人間が体験する豊かさと力を眺める賛歌に当てはめられます。豊かさと力の側面は、ダビデが神殿建設のために必要なものを準備する間に現れます。誰にでも起こる誘惑はダビデにとっても誘惑であったかもしれません。自分が所有するものの絶対的な支配者であるかのように振る舞ったり、所有物をプライドの源にしたり、他者への虐待に用いたりすることなどです。賛歌に示される祈りは、全てを神から与えられる「貧しい人」として人間の立場を表わします。

［復活した主、宇宙の王、王位の源］

地上の王は、神の王位を映し出す者にすぎません。「国はあなたのもの」。富む者は、自分が所有する良い物の源を忘れることはできません。「富と誉れはあなたから」。権力者は「力と権能」の源である神をどのように認識するか知るべきです。キリスト者はこの表現を祈りで用い、復活した主についての喜びを黙想するよう求められています。復活した主は、神によって「すべての支配、権威、勢力、主権の上に」（エフェソ 1:21）置かれ、栄光を受けました。キリストこそ宇宙の真の王なのです。

第 1 週　月曜日　朝課　第 3 唱和

詩編 29

1, 専門家の中には、詩編 29 を詩編最古のテキストと考える人もいます。力強いイメージによって詩編 29 は詩的で祈りに満ちたものに統合されます。確かにここでは、連続する嵐のとどろきが描かれています。「声」と「雷鳴」を意味するヘブライ語の「コル」という言葉は、鍵となる節の初めに繰り返されます。その節では、詩編の緊張の高まりが作り出されます。このことから、またヘブライ語の「コル」という言葉が何度も繰り返されることからも、詩編 29 は詩編注釈者によって「7 つの雷鳴の詩編」と呼ばれてい

ます。実際、詩編作者は、雷鳴を神の声の象徴と考えていたと言えるでしょう。超越的で到達不可能な神秘を伴い、創造された現実を混乱させ恐れさせるために、突如、分け入る声です。しかし最も深い所では、平和と一致の言葉を意味しています。ヨハネの福音 12 章を思い出すでしょう。そこでは、天国からイエスに応える声が雷鳴の形で群衆に伝わることが描かれています（ヨハネ 12, 29〜29 参照）。

朝の祈り（賛歌）に詩編 29 を勧めることで、時課（教会）の祈りは神の威光への深く信頼に満ちた崇拝の態度をとるよう招いています。

2, 前唱の部分は 2 つの時間と場所に導きます。中心部では（詩編 29:3〜9）、「大水」すなわち地中海から解き放たれる嵐について述べられます。作者の目に海水は、創造の美と輝きを攻撃し、むしばみ、破壊し、取り壊す混沌を作り出すものとして映ります。そして、嵐と怒りを観察することによって、神の無限の力を発見することになるのです。祈る人は嵐が北へ進み本土を打ちたたく様子を見、レバノンと時にヘルモンと呼ばれるシルヨン山の背の高い杉の木は、閃光を発する雷の攻撃を受け、おびえる動物のように稲妻の下で飛び上がります。とどろきは近づき、聖地を横切って南へ向かいカデシュの荒れ野を目指します。

3, 強力な動きと緊張の描写の後は、対照的な、詩編 29 の初めと終わりに描かれるもう 1 つの場面を黙想するよう招かれます（詩編 29:1〜2, 9〜11 参照）。シオンの神殿で神の栄光を崇拝することによって、苦悩と恐れに逆襲するのでした。エルサレムの聖地と天国の聖地をつなぐ伝達の経路があると言っていいでしょう。この 2 つの聖地では、神の栄光に捧げられる平和と賛美があります。鼓膜が破れそうな雷鳴の音は、典礼の歌声の調和に取って代わられ、恐れは神の保護への信頼に代わります。ここで神は「とこしえに王座につき」、つまり全被造物の最高支配者である主として「洪水の上に御座」をおいて現れるのでした（詩編 29:10 参照）。

4, 2 つの対照的な場面の前に、祈る人は 2 つの体験をします。 1 つ目は神の神秘を発見することです。神の神秘は嵐という象徴で示されますが、人間には理解することも支配することもできません。預言者イザヤが歌うように、主は雷鳴や嵐のように歴史に飛び込み、悪人や抑圧者の間に恐怖を蒔かれます。神の裁きが来ると、高慢な敵は嵐に打ちたたかれた木のように根こそぎにされ、また神の稲妻が粉々にした杉の木のようになります（イザヤ 14:7-8）。

現代の思想家ルドルフ・オットーは、この光の中で証明されるのは神の恐ろしさであると言い、その恐ろしさとは、言語を絶する超越性と存在、人間の歴史における完全な正義だと示しています。あざむかれて神の支配的な力に対抗することは、神の完全な正義によってむだ骨に終わることになります。賛歌の中で、マリアも神の行いのこの側面を称揚することができました。「神はその力をあらわし、思い上がる者を打ち砕き、権力をふるう者をその座からおろし」（ルカ 1:51-52）。

5, しかしながら、詩編 29 は神のみ顔のもう 1 つの側面を見せてくれます。それは親密な祈りや典礼の祝いの中で見つかります。思想家ルドルフ・オットーは、それが神の「魅力」であるとします。神の恵みから広がる魅力、神を信じる者に注がれる愛の神秘、義人に恵みが与えられるという落ち着いた確信です。悪の混沌、歴史の嵐、神の正義の罰に直面したとしても、祈る人は平和を感じ保護のマントに包まれます。神はご自分を称えその道に従う者を包まれるのです。祈りによってわかることは、主の真の願いが平安

を与えることだということです。
　神殿で不安は和らげられ恐れは一掃されます。「神の子ら」全員と天使や聖人たちと共に天の典礼の祝いに参加するのです。そして嵐、つまり人間の悪意の破壊という洪水のようなイメージの後には天国で神の恵みの虹が弧を描き「神と地上のすべての生き物、すべての肉なるものとの間に立てた永遠の契約」を思い出させてくれます(創世記 9,16)。
　このメッセージは、詩編 29 を「キリスト教的に」再読すると特に際立ってきます。詩編 29 の 7 つの雷鳴が宇宙の中での神の声を示しているのなら、この声が最も威厳をもって現れるのは、イエスの洗礼の顕現において、御父が「最も愛する子」として最も深いところでの一致を表わす時です（マルコ 1:11 参照)。聖バシリオは次のように書き記しています。「おそらくもっと神秘的に、主の声はイエスの洗礼で天から降った時、海の上で響き、これは私の愛する子と言いました。それから主は海に息を吹きかけ、洗礼によって聖化されました。栄光の神は天から雷鳴をとどろかせ、強い声でご自分を証しされます。福音の偉大な『声』を通して洗礼の後に変化が起こることも『雷鳴』によってわかるでしょう」(「詩編についての説教」30,359)。

第 1 週　火曜日　朝課　第 3 唱和

詩編 33

1,詩編 33 は、ヘブライ語のアルファベットと同じ数である 22 の節から成り立ち、宇宙と歴史の主を称賛する賛歌です。初めの数行から喜びのあまり震えが走っています。「神に従う人よ、神のうちにあって喜び歌え。神をたたえることは心の正しい人のわざ。琴を奏でて主に感謝をささげ、たて琴をかなでて神をたたえ、新しい歌を神に歌い、琴の音に合わせて喜びの声をあげよ」(詩編 33:1-3)。この叫びは音楽を伴い、信仰と希望、喜びと信頼の心の声を表現します。賛歌が「新しい」のは、創造と人間の出来事にある神の現存への確信が新たになるからだけでなく、救いの最後に歌われる完全な称賛を先取りするからでもあります。最後の日、神の国は栄光を実現していることでしょう。
　聖バシリオは、キリストにおけるこの最後の実現を切望して見つめ、次のように説明します。「一般に『新しい』というのは何か特別で存在し始めたばかりのことを指します。主の託身という驚くべき想像を絶する出来事を考えると、新しい聞いたことのない歌を歌わなければならないかもしれません。また、罪に身をゆだねていた人間の改心と刷新を回想し あがないの秘義を伝えるときも、新しく特別の歌を歌うかもしれません（「詩編についての説教」32,2;PG29,327)。簡単に言えば、聖バシリオによると、詩編作者の招きは次のようなことを示しています。「新しい歌を神に歌い」とはキリストを信じる者に向けられたもので、これは「『文字』という古代の習慣に従ってではなく、新しい『精神』で神を崇拝するように」ということを意味しているのです。確かに、神の掟を形式的に理解するのではなく、掟の中の「精神」を認める者は「新しい歌」を歌うのです（同上)。
　2,中心的な部分で、賛歌は称賛の 3 部作を形作る 3 つの部分につなげられます。最初の部分(6-9)では、神の創造のみ言葉が祝われます。宇宙の素時らしい建造物は、宇宙の神

殿のようですが、古代近東の宇宙生成論が言うような神々の戦いによって起こったり発展したものではありません。それどころか効果的な神の見言葉を基礎にしたものです。ちょうど創世記の1ページ目が教えています。「神は言われた。…そのようになった。」(創世記1参照)事実、詩編作者は繰り返しています。「神のことばによってすべてが造られ、神の仰せによってすべてはなった」(詩編32:9)。

祈る人は海の水を支配することを大変重要視します。聖書では、海の水は混沌と悪のしるしだからです。世界はその限界にも関わらず創造主のおかげで存在を続けます。ヨブ記にあるように、主に海岸で海が止まるよう命じられます。「ここまでは来てもよいが越えてはならない。高ぶる波をここでとどめよ」(ヨブ38:11)。

3,2つ目の部分、詩編33:10-15節で言われるように、主は人間の歴史も支配されます。地上の力の計画は強く対立して、歴史をたどる神の素晴らしい計画に反抗します。取って代わろうとする人間の計画は、不正義、悪、暴力をもたらし、正義と救いの神の計画に反対して立ち上がります。一時的、表面的に成功するものの、最後には単なる陰謀になり下がり、崩壊と衰弱へと運命づけられます。このことは箴言の書に要約されています「人の心には多くの計らいがある。主の御旨のみが実現する」(19:21)。同様に詩編作者が思い出させることに神はその超越的な住まいである天国から、全人類の道、ばかげた愚かな生き方にさえ同伴され、人間の心の秘密を直観されるということです。

「あなたがどこへ行こうと何をしようと、暗闇の中でも昼の光の中でも、神の目はあなたを見つめています。」と聖バジリオはコメントしています(「詩編についての説教」732,8;PG29,343)。神の啓示を受け入れ、人生についての勧めに従い、歴史を通る神の道をたどる人は幸せです。最後にただ一つのことだけが続きます。「神のはからいはとこしえに、みこころの思いは世々に及ぶ」(詩編32:11)。

4,詩編33の3番目、最後の部分では(16-22)、神だけが人間の出来事を支配するという点を2人の新しい天使から再び取り上げます。一方で、馬や兵隊から惑わされないようにと神は力強い者を招き、それから信仰者を招きます。信仰者はしばしば抑圧され死に瀕していますが、主が自分たちを破壊の深遠に陥れることはないという強い希望を持っています。こうして、詩編の「教理問答の」働きも明らかになります。詩編は、神に対する信頼への呼びかけに変わりますが、神は権力者の傲慢に無関心ではなく、人間の弱さのそばにおられます。人間の弱さが神を信頼し、神に自らをゆだね、神に祈り賛美するなら、弱さは元気づけられ支えられます。

聖バシリオはさらに説明します。「神に仕える者の謙遜は、神の哀れみに希望していることを示しています。確かに自分の大きな企てに頼らず、自分の働きによって義化されることを期待しない者は、救いへの唯一の希望を神の哀れみの中に見るのです」(「詩編についての説教」32、10;PG29、347)。

5,詩編33は、有名なテ・デウムの賛歌の一部となった交唱で終わります。「神よ、いつくしみをわたしたちの上に、あなたに希望をおく人の上に」(22)。神の恩恵と人間の希望が出会い抱擁します。ここで使われているヘブライ語の「ヘセド」の意味によると、確かに神の愛すべき忠実さは、マントのように私たちを包み、温め、守ってくださいます。そして、平安を与え、私たちの信仰と希望に安定した基盤を与えてくださるのです。

第１週　水曜日　朝課　第１唱和

詩編 36

1, 誰でも、仕事初めの日とかさまざまな人間関係が始まる、というような時にとる２つの基本的な態度があります。私たちは、善を選び取ることもできますし、悪に向かうこともできるのです。ただ今、私たちが拝聴いたしました詩編 36 は、この相対する２つの見方を描き出しています。一方では、今まさに起き上がろうとしている床の中で罪を企んでいる人がいます。もう一方では、「いのちの泉」(詩編 36:10)として神の光を捜し求めている正しい人がいます。神の善の深淵は、私たちの乾きを癒す生ける泉であり、私たちの心を照らす光であり、邪な人の悪の淵と対比されています。

このような２つのタイプの人々のことが、ただ今、唱えられた詩編の中で述べられていました。この詩編は、時課の典礼では第１週水曜日の朝の祈りの中に置かれています。

2, この詩編によって描き出されている最初の人物像は、罪人です(詩編 36:2-5)。ヘブライ語原典で語られている通り、「神に逆らう者の心の奥に罪はささやきかける」のです。なぜなら彼の心の中には、「よこしまなたくらみ」があるからです(詩編 36:2 参照)。この表現は、強烈なものです。それは、神のみ言葉に対抗するものとしての悪魔的な言葉は心の中に響き渡るものであり、邪なことを語るものであることを私たちに考えさせます。悪は彼にとって生まれつき備わっているもののようであり、言葉にも行いにも溢れているように思われます(詩編 36:3-4 参照)。彼は、朝早く、まだ床の中にいる間から(詩編 36:5 参照)、夜、眠りに落ちるまで、その日々を「よくない道」を選ぶことに費やします。罪人の継続的な選択は、彼の全生涯を巻き込み、死をもたらすひとつの選択に由来しています。

3, しかし、詩編作者は全く別な人物像へと向かい、そこに映し出されている神のみ顔を捜し求める人（詩編 36:6-13 参照)に憧れています。彼は、神の愛に真実で相応しい歌を立ち昇らせ、この歌に続いて、悪の魅力の闇から解放し、恩恵の光によって永遠に照らしてくださるようにという謙虚な祈りをもってこの詩編を終わっています。

この歌は、さまざまな象徴によって神の愛を表す真実で相応しい言葉の連祷を音節ごとに表現しています。恵み、忠実、正義、裁き、救い、ご保護の影、豊かさ、喜び、命。特に、神の特徴のうち４つを強調しています。この４つの特徴は、私たちが現在使用している言語以上に、より強烈な意味をもっているヘブライ語の言葉によって表されています。

4, すべての言葉の中で何よりもまず、「hesed(いつくしみ)」という言葉があります。この言葉は、同時に、忠実さ、愛、気高さ、優しさでもあります。この言葉は、主と民との間の契約を表現する基本的な方法のひとつです。詩編の中で 127 回も見出され、半数以上は古い契約についての部分で現れているということは重要な点です。amen アーメンという言葉から派生した「まこと」にあたる言葉である「emunah」は、不動、安全、絶対的な忠実を意味しています。Sedequah は救済的意味をもつ「正しさ」。それは、歴史の中に介入なさることによって、悪と不正から信じる者たちを解放なさる神の聖なる摂理的な在り方です。最後に、私たちは mishpat「さばき」を見出します。この裁きによって、神は、貧しい者、虐げられている者に心を配り、ながら、御自分の被造界を治

められます。
　ここで祈っている人が信仰を宣言するために繰り返しているこれら４つの神に関する言葉の通り、いつくしみ深く、まことで、正しく、救ってくださる神は、彼がこの世の道に踏み出そうとする時に、確かに彼とともにいてくださるのです。
　5, 私たちが神を称揚するためのさまざまなタイトルに、詩編作者はもう２つの力強いイメージを加えています。一方は、食物の豊かさです。それは、何よりもまず、聖なる生贄の肉をもってシオンの神殿で執り行われる聖なる宴を考えさせます。そこにはまた、その水によって乾いた喉だけでなく魂をも潤してくれる水と激しい流れというイメージもあります(詩編 36:9-10, 詩編 41:2-3, 詩編 62:2-6 参照)。主は、祈っている人に、ご自分の不死の命の充満を分かち合いながら、彼を新鮮にし、満ちあふれさせてくださいます。
　光という象徴がもうひとつのイメージとして語られます。「あなたの光のうちにわたしたちは光を見る(詩編 36:10)」。この光は、あたかも「滝」のように降り注ぎ、信じる者に対しては覆いを取り除いてくださる神の栄光の印としての輝きです。これは、シナイ山上でモーセに起きたことであり、これに代わってキリスト信者のためには「顔の覆いを取り除かれて主の栄光を映し出しながら、私たちも同じように変容される(II コリント 3:18)」ほどです。
　詩編の用語における「あなた(神)の光を見る」とは、具体的には、典礼の祈りが執り行われ、神のみ言葉が宣言される時にはいつでも、神殿において主にお会いしている、という意味です。キリスト信者もまた、いつもスムーズにいくとは限らない日々の生活のチャレンジに立ち向かう前に、主を賛美することによってこの一日を始めるなら、同じように「あなた(神)の光を見る」という体験に分け与るのです。

第１週　水曜日　朝課　第２唱和

ユディト 16:1-7

1, ただ今、私たちが唱えた賛美の歌は(ユディト 16:1-7)、神の民の生活の暗闇の時期にあって、神の解放の力を明らかにするという使命のゆえに、イスラエルの女性たち皆の誇りとなった英雄的女性、ユディトに向けられたものです。朝の祈りで私たちが唱えるのはほんの数行ですが、その数行は「いくさに勝利をおさめ」(ユディト 16:2)てくださった主をたたえるために鼓やシンバルを打ち鳴らし、フル・ヴォイスで歌うようにと私たちを招いています。
　最後の表現は、平和を愛される神のまことの姿を定義しており、この賛歌が表現している思考の世界を私たちに紹介しています。それは、イスラエルが、まったく不思議な方法で、すなわち、差し迫ってくる完全な敗北の予想から彼らを救うために介入してくださった神のみ業によって勝利を収めたということについてです。
　2, この聖なる著者は、数世紀前の出来事を、当時とはまた別の状況によって絶望の誘惑にみまわれている、信仰における兄弟姉妹たちを励ますことのできる実例として差し

出すために、再現して見せているのです。そこで、この著者は、イスラエルの民を自分の領土拡張の企てと偶像礼拝の罪に加担させるのに失敗して憤慨していたネブカドネツァル王が、イスラエルを征服し滅ぼし尽くすという特別な命令によって将軍ホロフェルネスを遣わした時、この民に起こった出来事を考察したわけです。神としての誇りを主張する彼にあえて逆らえるものは誰もいなかったのです。彼の将軍は、彼のふてぶてしさに預かって、神御自身に戦いを挑むことになってしまうからイスラエルに戦いを仕掛けるのは止めたほうが良い、という警告をあざ笑っていました。

事実、この聖なる著者は、自分の時代の信じる者たちを、契約の神への忠実さの内において堅固なものとするために、人は神に信頼すべきである、という原則を強調しています。イスラエルが恐れるべきまことの敵は、この地上のおける力ある人物ではなく、主に対する不忠実なのです。これこそ、彼らから神の保護を奪い取り、攻撃の的とするものなのです。他方、この民が忠実であれば、彼らは「その力と勝利において素晴らしい」(ユディト 16:13)神の力強さを期待することができるのです。

3, ユディトの物語全体はこの原則を輝かしく描き出しています。イスラエルの国は彼女の敵によって今や征服されてしまっているという場面です。この歌からこの時のドラマを想像してみましょう。「アッシリアが北の山から攻めてきた。つわものたちの軍隊を引き連れてやって来た。彼らの部隊は谷を埋め、丘を覆った」(ユディト 16:3)。この歌は、敵のつわものたちの逃走という皮肉な出来事によって頂点を迎えます。「彼は私の領土を焼き尽くし、私の若者たちを剣で殺し、私の幼子たちを地に打ち倒し、私の子供たちを獲物として捕らえ、私のおとめたちを分捕り品として持ち去った」(ユディト 16:4)。

ユディトの言葉の中に述べられている状況は、イスラエルによって体験された逃れる道がないように思われた時に救いが現れたという他の場面に似ています。奇跡的に紅海を渡って脱出できた、という救いがあったではありませんか。今も、強力で数え切れない軍隊によって包囲されて、すべての希望は拭い去られています。しかし、これらすべてにもかかわらず、御自分の民のための打ち負かされることのない守り手として啓示されている神の力が現されたのです。

4, 神のみ業は、つわものや兵士に頼る以上に華々しく現れます。以前、デボラの時代に、一人の女性ヤエルを通してシセラを消し去ったように(判事 4:17-21 参照)、今、困難に遭っている御自分の民の救いをもたらすために、何の武器も持たない一人の女性をお用いになられるのです。信仰において力強いユディトが敵の陣営に乗り込み、自分の美しさによって将軍を魅了し、辱めに満ちた方法で彼を殺します。この歌はこの点を強調しています。「全能の主は一人の女性の手によって彼らをくつがえされた。彼らの勇者は、若い男たちの手によって倒されたのでもなく、ティタンの息子たちによって撃ち殺されたのでもなく、背の高い巨人によって攻撃されたのでもなかった。ただ、メラリの娘ユディトが自分の容姿の美しさによって彼を打ち破ったのだ」(ユディト 15:5-6)。

ユディトという人物は、ユダヤ教の伝統だけでなくキリスト教の伝統さえも、神が弱くはかないものを優先なさる、正にそのためにこそ、神の力を現すためにお選びになる、ということを強調することを可能にする原型となるでしょう。彼女はまた、男性と対等なものとなるようにと呼ばれている女性が神の御計画の中で輝かしい役割を果たすた

めの、召し出しと使命を示す模範的な人物でもあります。ユディトの書の中のいくつかの表現は、ほぼ完全に、ユダヤ教の女性の英雄にマリアの前表を見るキリスト教の伝統に当てはめることができます。マリアがマニフィカトの中で、「権力をふるう者をその座からおろし、見捨てられた人を高められる」(ルカ 1:52)と歌う時、私たちは、ユディトの言葉のこだまを聞いているのではありませんか? 典礼的な伝統が、西方教会でも東方教会でも、キリスト教徒にとって、「あなたはエルサレムの光栄、イスラエルの喜び、私たちの民のほまれ」(ユディト 15:9)というユディトに捧げられた賛歌をイエズスの母マリアに帰することを愛しているのは何故かということが理解できるでしょう。

5, この勝利の体験から、ユディトの歌は、神は「偉大、栄光に満ちておられる」ということを認めながら、神に新しい歌を捧げることによって終わっています。同時に、すべての被造物は、御自分のみ言葉と共に全てを創造し、御自分の霊と共にすべてを形作った神に服従していることを知らされます。この神のみ言葉に誰が抵抗できましょう? ユディトはこのことを非常に力強く思い起こさせてくれます。創造主であり歴史の主であるお方のみ前で、山々はその基から揺れ動き、岩は蝋のように溶けるのです(ユディト 16:15 参照)。それらは、あらゆるものは神の力の前には無に等しいことを思い起こさせてくれる効果的な喩えとなっています。しかし、勝利の歌は恐怖を煽ろうとしているのではなく、力づけようとしているのです。事実、神は、打ち負かされることのない御自分の力で、御自分に忠実な者たちを支えてくださるのです。「あなたはおそれ敬う者に、いつもいつくしみを注がれる」(ユディト 16:15)。

第 1 週　水曜日　朝課　第 3 唱和

詩編 47

1, 「すべてを越える神、おそるべきかた、世界を治める偉大な王!」この特徴ある宣言は、ただ今私たちが祈った詩編 47 の中で様々な異なる響きをもって繰り返されています。この詩編は、宇宙と歴史の主権者である主に向けられた賛歌として構成されています。「まことに神は世界の王、…神は諸国の民を導き、とうとい座についておられる」(詩編 47:8, 9)。他の似通った構成の詩編(詩編 92, 95-98 参照)と同様、この世界と人類の王である主に向けられたこの賛歌は、典礼の祝いの雰囲気を思わせます。この理由から、私たちは、終わりない永遠の神が御自身を現し、人々と出会われる場所である神殿から天に向かって立ち昇るイスラエルの霊的な賛美の中心にいることになるのです。

2, 私たちは岸辺に打ち寄せてくる２つの海の波のように、規則的なテンポで、この喜びに満ちた賛美の歌をたどっていくことにいたしましょう。イスラエルと諸国との間の関係を考察するにあたって、その方法において、この歌には区別があります。この詩編の最初の部分では、関係は一種の支配です。神は、「すべての民をわたしたちに委ね、すべての国をわたしたちのものとされた」(詩編 47:4)。第２の部分では、関係は一種の連帯です。「アブラハムの神の民として諸国の王は集められ」(詩編 47:10)。大きな進歩があるのをお気づきでしょう。

最初の部分(詩編 47:2-6)では、「すべての民よ、手を打ち鳴らし、神に喜びの叫びをあげよ!」(詩編 47:2)と語ります。この祝いの拍手の中心は卓越した主の崇高な御姿です。この詩編は、この主に向かって３つの栄えある肩書きを帰しています。「すべてを越える髪、おそるべきかた、世界を治める偉大な王」(詩編 47:3)。これらの言葉は、神の超越性、絶対的な存在の優越性、全能を称揚しています。復活なさったキリストもまた、宣言なさいました。「天と地のすべての力は私に与えられている」(マタイ 28:18)。

3, 地上のすべての民族に対する神の普遍的支配の中でも、詩編作者は、神に選ばれた民、「愛されたもの」、最も貴重で愛された遺産(詩編 47:5 参照)であるイスラエルにおける神の特別な現存を強調しています。イスラエルは敵対する諸民族に対する勝利によって現される、神の特別な愛の対象なのです。戦いの最中にあって、イスラエルの軍隊に伴っていた契約の櫃の存在は、神の助けの保障でした。勝利の後、契約の櫃がシオンの山に戻されると(詩編 68:19 参照)、民はこぞって叫びを上げました。「神は喜びの叫びのうちに、角笛の響きとともに のぼられた。」(詩編 47:6)。

4, この詩編の第２部は、もうひとつの賛美と祝いの歌の波によって始まっています。「神をたたえてほめ歌え。わたしたちの王をほめ歌え。…力のかぎりほめ歌え」(詩編 47:7-8)。今も、人は、御自分の主権に満ちてその座についておられる主に向かって歌います(詩編 47:9 参照)。王座は「とうとい」として定義されています。死すべき罪深い人間によっては近づき難いものであるからです。しかし、シオンの神殿の最も聖なる場所にすえられている契約の櫃もまた、天の玉座です。このような方法で、遥かに超越しておられる神は、聖にして永遠でありながら、時間と空間に御自身を適合させながら、御自分の被造物に近づいてくださるのです(I 列王記 8:27, 30 参照)。

5, 詩編は普遍的な開きという驚くべきしるしをもって終わっています。「アブラハムの神の民として諸国王は集められた」(詩編 47:10)。ここでは、イスラエルのみならず、諸民族の根である太祖アブラハムに立ち戻っています。彼の子孫である選ばれた民は、神がすべての人の神ですから、すべての国民と文化を主のもとにひとつに集める使命を委ねられています。東から西に至るまで、彼らは平和と愛の王に、一致した兄弟として出会うために、シオンに集められるのです(マタイ 8:11)。預言者イザヤが希望をかけている通り、互いに敵対していた諸民族は、自分たちの武器を置いて、神の支配、正義と平和の当地のもとに共に生きるようにと招かれるようになります(イザヤ 2:2-5 参照)。すべての人々の目は、主が御自分の神性の栄光の内に啓示されるために「昇られる」新しいエルサレムに向けられています。「あらゆる国、民族、民、言語の、誰も数えることができないおびただしい人々が、…大声で叫んでいた。『救いは玉座におられる神と子羊に!』」(黙示録 7:9, 10)。

6, エフェソへの教会への手紙は、ユダヤ主義から来たのではないキリスト者に語りかけながら、贖い主キリストの神秘の内にこの預言が現実のものとなったと考えて、次のように断言しています。「生まれながらに異教徒であるあなた方は、…かつてはキリストとは関わりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約とは関係なく、希望もなく、神を知らずに生きていました。しかし、あなた方は以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエズスにおいて、キリストの血によって近いものとなったのです。事実、キリストは私たちの平和であります。敵意という隔ての壁を取り壊し、二つのものを一

つにしてくださいました」（エフェソ 2:1-14 参照）。

キリストにおいて、この詩編で歌われている神の王権は、この地上のすべての民の集いの中で実現されるのです。8 世紀の無名の著者が、このことを解説して次のように言っています。「諸国民の希望であるメシアの到来まで、異邦人は神を礼拝することなく、神がどなたであるかということも知らないままでした。メシアが異邦人を贖ってくださるまでは、彼らの従順と礼拝によって神が諸国民を支配することもありませんでした。しかし、今や御自分のみ言葉と御自分の霊によって、神は彼らを支配しておられます。なぜなら、神は彼らをにせものから救い出し、彼らを御自分の友としてくださったからです」（8 世紀の無名のパレスチナ人、アラブ人キリスト教徒の説教 p. 100）。

第１週　木曜日　朝課　第１唱和

詩編 57

1, それは暗い夜です。貪り食おうと身構える獣たちが闇の中で取り囲みながら待ち構えています。ここで祈っている人は、光が暗闇と恐れを打ち払ってくれるようにと夜明けを待ちわびています。これが、今日、私たちが考察しようとしている詩編 57 の背景です。この祈りは、喜びをもって主を賛美することができますように、と心配しながら待ちわびていた夜明けになって、祈りを捧げている人が、その夜について語っているひとつの夜の祈りです（詩編 57:9-12）。事実、この詩編は、神に対して語られるドラマティックな哀歌から、もうひとつの詩編（詩編 108:2-6 参照）で再び響き渡ることになっている言葉を用いている後半部分、穏やかな希望と喜びに溢れた感謝へと、移っていきます。

現実的に、人は、恐れから喜び、夜から昼、悪夢から穏やかさ、嘆願から賛美へという移行に参加するのです。これは、詩編の中にたびたび描写されているひとつの体験です。「あなたは嘆きを踊りに変え、荒布を晴れ着に替えてくださった。わたしの心はあなたをたたえ、黙っていることがない。わたしの神、主よ、あなたをとこしえにたたえよう」（詩編 29:12-13）。

2, 私たちが黙想している詩編 57 は、２つの部分を持っています。第１の部分は、義人を打ちのめそうとたくらむ邪な者の襲撃を前にした恐怖の体験です（詩編 57:2-7 参照）。この場面の中心には、攻撃しようと身構えているライオンがいます。やがて、このイメージが、槍、弓矢、剣で完全に武装した戦争の場面に変容されます。祈っている人は、ある種の殺し屋集団の襲撃を感じ取っています。自分の周囲に獲物を捕らえるための網を張り、落とし穴を掘っている猟師たちの一群がいます。ところが、この張り詰めた雰囲気は突如として消え去ってしまうのです。事実、最初（詩編 57:2 参照）から、神の翼という保護のシンボルが現れていました。このシンボルは、特に、シオンの山の聖なる神殿における信者たちの間の神の現存のしるしである翼を広げたケルビムと共にある契約の櫃に由来しています。

3, 祈っている人は、神の救済的愛に相応しい属性である「いつくしみ」と「まこと」（詩編 57:4）という象徴的な名で呼ばれている神の使いを天から送ってくださるように

と粘り強く懇願しています。この理由から、野獣どもの恐ろしいうなり声や迫害者たちの裏切りに身震いしながらも、信じている人は、ライオンの穴の中のダニエルのように(ダニエル 6:17-25 参照)、穏やかに信頼の内に留まっています。

主の現存は、敵どもが自分で自分に罰を下すという手段によって、速やかにその効果を表します。敵どもは、義人のために掘った落とし穴に落ちてしまったのです(詩編 57:7 参照)。常に詩編の中で表現されている、神の正義に対するこのような信頼は、絶望してしまったり、悪の力に打ち負かされてしまうのを防いでくれます。神は信じる者の見方となってくださり、遅かれ早かれ、邪な人々の巧妙な手段をくつがえし、彼らを自らの悪巧みの中につまずき倒れさせてしまわれるのです。

4, 今、私たちは、この詩編の第２部(詩編 57:8-12 参照)にたどり着きました。ここには、その強さと美しさのゆえに輝きを放つ１節があります。「神よ、わたしの心はひるむことなく、あなたをたたえて歌う。目ざめよわたしのたて琴、琴をかなでてあけぼのを呼びさまそう(詩編 57:8-9)」。今、闇は打ち払われました。救いの夜明けが祈っている人の歌に彩りを与えています。

「あけぼのを呼びさます」、すなわち恵み深い神と考えられていた太陽が再び姿を現すようにさせるのは、エジプトやフェニキアの司祭たちの務めとされていましたが、詩編作者は、自らにこのイメージを当てはめながら、聖書の宗教的な描写に属するテーマに置き換えているように思われます。詩編作者は、また、試練や喪に際しては覆いをされて吊るされていますが(詩編 137:2 参照)、解放と喜びの時には祝いの音楽を響かせるために再び「目ざめる」ことになっている楽器の使い方について言及しています。典礼から希望が花咲くのです。御自分の民に再び近づいて自分たちの祈りを聴いてくださるようにと願いながら、人は神に立ちもどるのです。詩編の中では、たびたび、あけぼのは、夜の祈りの後で神が御厚意をお恵みくださる時なのです。

5, この詩編は、嘆願の第１部(詩編 57:4 参照)において、すでに別な名前で現れた救いに関する偉大な２つの属性(いつくしみとまこと)によって働いておられる主への賛美によって終わっています。今、力強く響き渡る神の善性と忠実さがこの場面に登場してきます。これらは、その存在によって天を満たし、試練と迫害の暗闇の中に輝く光のようです(詩編 57:11 参照)。この理由から、キリスト教の伝統では、この詩編 57 は、信じる者から死の恐怖を拭い去りながら輝き渡り、天の栄光の地平線を切り開いてくれる御復活の光と喜びの歌として使われています。

6, ニッサのグレゴリオは、あらゆる人が神の知恵の認識に開かれる体験をする時に起こる事柄について、ある種の典型的な描写をこの詩編のいくつかの言葉の中に見出しました。「まことに、神は私を救われた、聖霊の雲で私を覆い、私を足の下に踏みにじった人々が卑しめられました」(『詩編の表題』より)。

グレゴリオは、最後にこの詩編の表現を引用しながら、次のように語り、結論を述べています。「おぉ、神よ、諸々の天よりも高められますように。あなたの栄光は地上を覆いますように。神の栄光は世界に及び、その栄光は救われた人々の信仰によって増し加わり、天の諸々の力は私たちの救いのために喜び躍りながら、神を褒め称えています」(同上 p, 184)。

第１週　木曜日　朝課　第２唱和

エレミア 31:10-14

1,「諸国の民よ、神のことばを聞け。遠い島々に告げ知らせよ(エレミア 31:10)」。ただ今、私たちが拝聴いたしました賛歌の中でエレミアの荘厳な言葉をもって宣言さたことは、何と良い知らせなのでしょう。それは、慰めの知らせであり、それ(30-31 章)を含む数章が「慰めの書」と呼ばれているのは偶然のことではありません。この知らせは直接的には昔のイスラエルに向けられていますが、ある意味で、福音のメッセージの前印となっています。

この知らせの中心は次のようなものです。「神はまことにヤコブをあがない、強い者の手から買いもどされた」(エレミア 3:11)。これらの言葉の歴史的背景は、722 年、アッシリアが聖地の北部を占領してから約一世紀後に、神の民によって体験された希望の内に見出されます。預言者エレミアの時代には、ヨシュア王の宗教刷新が民を神との契約に立ち返らせ、裁きの時は終わったという希望を堅固なものとしていました。北王国はその自由を回復し、イスラエルとユダは再び一致を取り戻すのではないか、という将来の希望が堅固なものとされていました。すべてのもの、「遠い島々」さえ、この素晴らしい出来事の証人となるはずでした。イスラエルの牧者である神は必ず介入して下さいます。御自分の民が打ち捨てられることをお許しになられた神は、今、彼らをひとつに集めて下さろうとしているのです。

2, 喜ぶようにと言う招きは、深く感動的なイメージに助けられて、構成されています。そこでは、追放されていた人々は「来て喜び歌い」、主の神殿だけでなく、あらゆる良いもの、ぶどう酒、小麦、油、若者たちの群れと青草をも見出すであろうという未来を描写しています。聖書は、抽象的な霊性を知りません。主は、人間生活のあらゆる次元において配慮してくださっているのですから、約束されている喜びは、人間の内的存在に影響を及ぼすだけではありません。物質的な必要性についてさえ み摂理に信頼を置くようにと弟子たちを招きながら(マタイ 6:25-34 参照)、イエズス御自身もこの点を強調なさいました。

この賛歌は、神はすべての人を幸福にしようとしておられるのだ、という視点に基づいて語りかけています。すべてを包含する幸福とはどのようなものであるのかを描写するために、預言者は「うるおされた園」(エレミア 31:12)、その新鮮で実り豊かな数々のイメージを用いています。喪は、えり抜きの分け前とあふれる良いものによって満たされている祝い(エレミア 31:14 参照)に変えられますから、自然に彼らは踊り出し、歌い出すでしょう。それは、究極の喜び、民の喜びとなることでしょう。

3, 私たちは、この夢がまだ実現していないことを知っています。神が約束を破ったからではありません。彼らの不忠実のためです。民がこの幻を侮ったためです。エレミアの書は、苦しみと厳しさ、イスラエルの歴史の最も悲しい出来事のひとつへと徐々に導かれていきます。北王国が捕囚から帰還できなかったばかりか、ユダ王国も紀元前 587 年ネブカドネツァルによって占領されてしまったのです。バビロンの岸辺で柳に竪琴を掛ける(詩編 136:2 参照)苦しい日々が始まってしまったのです。見張りの者たちを満足させるために歌おうという望みはありません。神が御自分の住まいとしておられた国、

自分の国から引き離されている時に、誰も喜ぶことなど出来ません。

4, 喜びなさいというこの歌の招きは、その意味を失ってはいません。実際、この喜びの根拠となっている最終的な理由は堅固に保たれています。私たちはそれを、時課の典礼の中で私たちが用いている大変情熱的な数節の中に見出します。この賛歌の中の喜びの表現を読みながら、この数節を心に留めるようにしなければなりません。この数節が響き渡る言葉をもって述べているのは、御自分の民に対する神の愛です。これらの数節が指し示しているのは、取り消されることのない契約です。「私は永遠の愛をもってあなたを愛した」(エレミア 31:3)。エフライムを最初の子と呼び、御自分の優しさをもって包んでくださっている神の父性の表れを歌っているのです。「泣きながら出て行った彼らを、私は慰めながら連れ帰るだろう。彼らがつまずくことのないようにまっすぐな道を通って、流れのほとりにそって彼らを歩ませよう。なぜなら、私はイスラエルの父なのだから」(エレミア 31:9)。子どもたちの応答の欠如のためにこの約束はまだ成就できずにいますが、御父の愛は、全ての人々に対して優しく触れ続けています。

5, この愛は、イスラエルの歴史の浮き沈み、喜びと悲しみ、成功と失敗をひとつにまとめあげている黄金の糸です。神の愛は誤ることがありません。罰は、教え、救うための愛の表現です。

この愛という堅固な岩の上に、この賛歌の喜びへの招きは、あらゆる人間的な弱さにも関わらず、遅れているようであっても、いずれは必ず実現する、未来の出来事に対する神の御計画を思い起こさせてくれます。この未来の出来事は、キリストの死と復活、聖霊の賜物による新しい契約のおいて成就することになるのです。しかし、それが完全に成就されるのは、主が時の終わりに来臨なさる時なのです。このような確信によって解釈されているエレミアのあの「夢」は、人間の忠実さという条件の下で、現実の歴史的な出来事となり続けます。そして、何にも増して、最終的には、神の忠実さによって保障され、キリストの内に示されている神の愛の内にすでに始まっています。

エレミアの祈りを読みながら、私たちの心に、ナザレの会堂でキリストによって宣言された素晴らしい知らせ、福音(ルカ 4:26-21 参照)をこだまさせるようにいたしましょう。キリスト教生活は、真の『喜びの祝い』となるように招かれています。この祝いを脅かすのは私たちの罪だけです。私たちにエレミアの言葉を祈らせることによって、時課の典礼は、私たちの生活をいつまでも私たちの贖い主であるキリストに結びついたものにするように、そして、私たちの個人及び共同体の生活の中でキリストの内にまことの喜びの秘訣を見出すように、と招いているのです。

第１週　木曜日　朝課　第３唱和

詩編 48

1, ただ今朗読された詩編は、「大王の都」(詩編 48:3)であるシオンの誉れについての賛歌です。当時、そこは主の神殿の座であり、人類のただ中における主の現存の場でした。今、キリスト教信仰は、この詩編を「私たちの母」(ガラテア 4:26)である「天のエルサ

レム」に当てはめています。この賛歌の典礼的な音色は、神の救いを思い巡らすエルサレムの平和に満ちた様子、祝いの行列へと呼び招くもので、この詩編 48 は、地平線上に雲が立ち込めているにもかかわらず、賛美の賛歌を捧げつつ一日を始めるために使うことができる祈りを差し出しています。

この詩編の意味を十分に味わうために、この詩編の構成の霊的な鍵を差し出し、私たちをこの詩編の奥深い雰囲気へと招いてくれているような、３つの助けになる歓呼の叫びが、最初と中ごろと最後とに配置されています。「神は、偉大、すべての人にたたえられる」（詩編 48:2）、「神よ、わたしたちはあなたのすまいであなたのいつくしみを思いめぐらす」（詩編 48:10）、「シオンはわたしたちの神のもの、神はとこしえにわたしたちを導かれる」（詩編 48:15）。

2, 神と「わたしたちの神の都」（詩編 48:2 参照）とを崇めるこの 3 つの歓呼の叫びは、この詩編の大きな 2 つの部分を囲んでいます。最初の部分では、聖なる都シオンが、神の御保護のマントのもとで穏やかに、自分の敵の度重なる攻撃に対して勝利したことを喜び祝っています（詩編 48:3-8 参照）。そこには、この都を定義する効果的な連祷があります。輝く光としてすえられた素晴らしい丘、地上の諸国民の喜びの源、天と地が出会う唯一の「オリンパス（神々のいます所）」。預言者エゼキエルの表現を用いるなら、都の中の現存のゆえに、「インマヌエル（主がそこにおられる）都」（エゼキエル 48:35 参照）です。しかし、攻撃を仕掛けようとしていくつもの武装した集団がエルサレムを取り囲んでいます。これは、神の都の輝きに対して戦いを挑んでいる悪の象徴です。破壊は間もなく起こるであろう当然の成り行きです。

3, 実際、地上の権力者は、聖なる都を攻撃することによって、その王である主の怒りを引き起こしました。詩編作者は、出産という象徴を用いて強力な軍隊の高慢の崩壊を示しています。「陣痛のような苦しみに襲われた」（詩編 48:7）傲慢は惨めな弱さに、力は挫折と混乱に変容させられてしまいます。

もうひとつの象徴は、同様の考えによって表現されています。混乱した軍隊は、東から吹いてくる暴風によって引き起こされた嵐が追い散らす無敵の艦隊に比較されています（詩編 48:8 参照）。神の御保護の影もとに立つ人のために、揺るぐことなく確実に留まるものがあります。最後の言葉は、邪な者ではなく善良な人の手の中にあります。敵の力が偉大で無敵なものに思われる時にも、神はそれに打ち勝たれるのです。

4, 信じる人は神殿そのものの中で解放者である神に対する自分の感謝を祝います。この人が捧げる感謝は、契約神学の典型であるヘブライ語のヘセドという語で表される、主のいつくしみ深い愛に対する賛美の歌です。今、私たちはこの詩編の第 2 の部分にたどり着きました（詩編 48:10:14 参照）。神の忠実さ、正しさ、救いに対する賛美の偉大な歌（詩編 48:10-12 参照）の後で、神殿と聖なる都を取り巻く一種の行列があります。神の確かな御保護という塔が数え上げられ、シオンをお造りになった御方によってこの都に与えられた不動性を表現している塁壁が固められます。エルサレムの城壁は語り、その石は、父祖たちがその子どもたちに語った物語を通して（詩編 77:3-7 参照）「後の時代（48:14）」に語り継がれるべきみ業を思い起こしています。シオンは、主の救いのみ業の途切れることのない連鎖の場です。この救いのみ業は、カテケジスの中で宣言され、典礼の中で祝われ、こうして、信じる者たちは、自分たちを解放して下さる神に希

望し続けることでしょう。

5,結びの交唱には、御自分の民の牧者という、主についての最も美しい定義があります。「神はとこしえにわたしたちを導かれる」(詩編 48:15)。シオンの神は、脱出の神、解放の神、エジプトでの奴隷状態においても、荒野での放浪においても民のそば近くにいてくださった神です。今、イスラエルは約束の地に安らかに住まい、主は決して自分をお見捨てになることはないと知っています。エルサレムは主が近くにいて下さることのしるしであり、神殿は主の現存の場です。

キリスト者はこの表現を読み返すとき、神の新しい生ける神殿であるキリストの観想へと移行します(ヨハネ 2:21 参照)。そして、天のエルサレムへと目を向けます。「全能の主である神と子羊とがその神殿であり、神の栄光がその光、子羊がその灯り」(黙示録 21:2-23)ですから、そこではもはや神殿も外面的な灯りも必要ではありません。聖アウグスチヌスは、聖書の諸書の中には「地上の都について語られている全ては、天のエルサレムにあてはめられるか、あるいは天のエルサレムによって現実のものとされる事柄であり、比喩によって何らかの形で天のエルサレムを象徴しているのですから、地上の都にのみ関係していることは何もありません」(「神の都」17 章 3,2)。ノラの聖パオリヌスはアウグスチヌスの主張をこだましています。この詩編を解説しながら、「私たちは天の自由なエルサレムの壁の中の生きている石として建て上げられる」(セベルスに宛てた書簡 28,2)のであるから祈るように、と彼は私たちに勧告しています。この教父は、この都の堅固さと簡潔さを観想しながら、続けています。「事実、この都に住んでいるのは、三位一体であることを啓示されています。私たちの魂の住まいがこのお方の上に基礎を置き、このように偉大な基礎に相応しく、このお方の上に建てられているのであれば、この都に入る扉は永遠へと私たちを導き、このお方の牧場に私たちを連れて行ってくれることでしょう」(同上)。

第 1 週　金曜日　朝課　第 1 唱和

詩編 51

1,ただ今、私たちは、詩編の中でも最も有名な祈りであり、最も熱心に皆が用いる痛悔の詩編、罪と許しの賛歌、罪悪と恩恵についての意味深い黙想である「Miserere」を拝聴いたしました。時課の典礼は、毎週金曜日にこの祈りを私たちに祈らせてくれます。幾世紀もの間、この祈りは、いつくしみ深い神に対して注ぎ出される償いと希望の印として、多くの忠実なユダヤ教徒やキリスト教徒の心から天へと立ち昇ってきました。

ユダヤ教の伝統はこの詩編を、バトシェバとの姦淫と、彼女の夫ウリアの殺害のゆえにダビドを非難する預言者ナタンの厳しい言葉によって、償いをするようにと呼びかけられたダビドの唇に乗せています(詩編 51:1-2、2 サムエル 11-12 参照)。しかし、この詩編は、後代の幾世紀にも渡って、預言者エレミアやエゼキエルの教えに従い、贖われた人間の内に置かれる「新しい心」、神の「聖霊」という趣旨を再発見した、数え切れない罪人たちによって祈られることによって、豊かなものとされていきました(詩編

51:12 ; エレミア 31:31-34 ; エゼキエル 11:19, 36:24-28)。

2, 詩編 51 は 2 つの地平線を描き出しています。まず、罪という暗い領域です(51:3-11)。そこでは、人は存在する以前の自分を突きつけられています。「わたしは生まれた日から悪に沈み、母の胎に宿った時から罪に汚れていた」(詩編 51:7)。この表現が、キリスト教神学によって定義されている通りの原罪の明白な定義として受け入れられないとはいえ、疑いもなく原罪に関連付けられています。まさに、これは、生まれつき死ぬことになっている人間のもろさという意義深い次元を表現しています。この詩編の最初の部分は、明らかに、神の御前で行われたものとしての罪というものの分析になっています。ヘブライ語の 3 つの言葉が人間の自由の乱用から生じたこの悲しい現実を定義付けるために用いられています。

3, 最初の「hatta」という言葉は、文字通りには「目標に届かずに落ちる」という意味です。罪は、私たちの交わりの根本的な目的である神と、それに連なる私たちの隣人から遠く離れたところに導く一種の脱線です。

第 2 のヘブライ語の言葉は、「awon」です。この言葉は私たちを「ねじれ」とか「湾曲」というイメージに引き戻します。罪は、まっすぐな道から無理にねじ曲がっていく一種の脱線です。それは、善と悪とをさかさまに捕え、歪曲し、秩序を崩すことです。イザヤはこの意味で次のように宣言しています。「善を悪と呼び、悪を善と呼ぶ者、光を闇に変え、闇を光に変える者に呪いあれ。(イザヤ 5:20)」確かに、聖書においてはこの理由から、回心は、自分の道を矯正して正しい道に「立ちもどる(ヘブライ語では「shub」)」こととして表現されています。

詩編作者が罪を言い表すために用いている第 3 の言葉は、「pesha」です。それは、神の支配に服従することへの反抗と、その結果として、神に対して、また、人間の歴史についての神の御計画に対して言い渡されたあからさまな挑戦を、表現しています。

4, しかしながら、人が自分の罪を告白するなら、救いをもたらす神の正義には、徹底的にその人を浄化する備えがあります。こうして、私たちはこの詩編の第 2 の霊的部分にたどり着きます。恩恵の照らしという領域です(詩編 51:12-19 参照)。罪を告白することによって、祈っている人は神が働かれる光の地平線を切り開くのです。主は罪を取り除くという消極的な仕方で働かれるだけではありません。御自分の命を与える聖霊という手段によって罪深い人間を再創造なさるのです。神は、その人の人格の中に新しい清い「心」すなわち、新しい良心を置いてくださり、澄んだ信仰と神に喜ばれる礼拝の可能性を開いて下さるのです。

オリゲネスは、キリストのみ言葉と癒しのみ業によって、主が成し遂げて下さる神的治療について語っています。「神は、体のために、賢慮をもって混ぜ合わされた癒しのハーブの中にさまざまな効果を準備しておいて下さったように、魂のためには、聖書の中に散りばめておいて、御自分で抽出したくださったさまざまなみ言葉という薬を準備してくださっています。…さらに、神は、もうひとつ、御自身を医薬品の原型として与えて下さいました。主は御自分について次のようにおっしゃっています。『医者を必要とするのは健康な人ではなく病人ではないか？』主は、あらゆる弱さと病を癒すことの出来る医者なのです」(オリゲネス『詩編についての説教』)。

5, 詩編 51 の豊かさは各節の注意深い解釈に値します。これから続く金曜日度に朝の

祈りで出会う時、これを続けることにいたしましょう。この偉大な聖書的祈りの全体的な眺めは信者の日常生活にしみこむべき霊性の原則的な構成要素をいくつか啓示しています。何よりもまず、自由な選択と考えられている、倫理的及び神学的レベルに関する否定的な意味での生き生きとした罪意識です。「あなたに対して、あなたに対してだけ、私は罪を犯し、あなたの目にとって悪であることを行いました」(詩編 51:6)。

この詩編の中にはまた、回心の可能性の生き生きとした意識もあります。真摯に悔い改めた罪人は(詩編 51:5 参照)、神の現存から自分を追い出さないで下さいと懇願しながら、自分の惨めさと赤裸の内に神のみ前にやってきます(詩編 51:13 参照)。

最後に、神の赦しに対する確固とした確信は、罪人の「とがをゆるし、洗い、清め」(詩編 51:3-4 参照)、変容された精神、舌、唇、心を持つ新たな被造物へと彼を変容することが出来ます(詩編 51:4-19 参照)。聖ファスチナ・コワルフスカが次のように書いています。「私たちの罪が夜のように黒くても、神のいつくしみは私たちの惨めさよりも偉大です。たった一つのことだけが必要とされています。罪人は、主の聖心に向かって扉を開いたままにしておかなければなりません。…あとのことは神さまがして下さいます。…すべてのことは、初めから終わりまで主のいつくしみによるのです」(「神のいつくしみのイコン　シスター・ファスチナのメッセージ」より)。

第 1 週　金曜日　朝課　第 2 唱和

イザヤ 45 章

1,「まことに、あなたはかくれておられる神(45:15)」。朝の祈りの第 1 金曜日の詩編として祈られる賛歌の導入であるこの一節は、創造と歴史において現された神の偉大さについての第２イザヤの黙想から取られたものです。この神は、見通すことの出来ない御自分の神秘の内に隠れたままでおられるにもかかわらず、御自身を現されたのです。「隠れておられる神」と定義付けられています。どのような考察も神を指し示すことはできないのです。人は、ただ、この世界の中で神の現存を観想し、神の痕跡を識別し、礼拝と賛美の内にひれ伏すことしかできません。

この黙想は、バビロン追放の時代に御自分の民のために神が成し遂げられた驚くべき解放という歴史的なできごとから生じてきたものです。一体誰が、イスラエルの捕囚民たちが自分たちの国に戻ることができるなどと考えていたでしょう。バビロンの強大さを考えれば、絶望するのはたやすいことでした。ところが、そこに偉大な知らせが届いたのです。神のビックリ箱です。その驚きが預言者の言葉の中に反響しています。脱出(出エジプト)の時のように、神が介入して下さる。かつて、驚くべき罰をもってファラオの抵抗を打ち破って下さったように、今、神は、ペルシャの王キュロスを選んでバビロンの力を踏みにじり、イスラエルの自由を取り戻して下さろうとしておられるのです。

［人間の自由を尊重しながら、神は歴史の中で働いておられる］

2,「イスラエルの神、救い主よ、あなたは御自分を隠しておられる神」(イザヤ 7 45:15)。これらの言葉によって、預言者は、すぐには現れてこなくても、神が歴史の中に介入さ

れる、ということを意識するようにと私たちを招いています。神は「場面の裏で」働いておられるのだ、と言うことができます。神は、御自分の被造物の自由を尊重しながらも、この世界のできごとの糸を握っておられる、神秘的で見ることのできない導き手です。「地を形作り、これを堅く立てられたかた」(イザヤ 45:18)である神の摂理的なみ業の堅固さは、絶えることのない神の現存が信頼に値することを知っている信じる人にとって、希望の源泉です。

本当に、創造のみ業は、時代の闇夜の中に見失われたできごとではありません。この世界は、あの始まりの後、自らに任せられているのだと考えるべきです。神は、御自分の手によってなされる創造を続けておられます。神を認めるということは、神のユニークさを告白するということです。「わたしは主、わたしのほかに神はない」(イザヤ 45:21)神は唯一の神であるというのが定義です。何者もこの神とは比べものになりません。すべてのものはこの神に従属しているのです。ここから、預言者たちが荒々しい言葉で警告している偶像礼拝の拒絶に続きます。「木の偶像をになう者、人を救えない神に祈る者は何も知らない」(イザヤ 45:20)人間が産み出したものの前で、どうしてひれ伏して礼拝できましょう？

3,私たちの時代には、唯一の神への霊的な礼拝に矛盾することのない象徴的な価値を持つという意識なしに、画像それ自身を否定するかのようなこの反論についての敏感さは消え去ったかのように思われます。確かに、賢明な神の教えであり、この教えは、画像排斥の厳格な遵守によって、歴史的にイスラエルを多神教の汚染から守りました。教会は、キリストの受肉の内に現された神のみ顔に自らの基礎を置きながら、ニケア公会議(787)において、本質的なものに関連した価値を理解させるものであること、という条件のもとに、聖なる画像の使用の可能性を認めました。

預言者の警告は、あらゆる形式の偶像礼拝の見方について重要性を保っていますが、画像の相応しくない使い方を憂慮しているのではなく、むしろ、そこに隠されている、偶像礼拝によって人々や物事が神御自身に取って代わる絶対的な価値と考えられるようになってしまうという姿勢に関してのことです。

4,創造という側面に関して、この賛歌は私たちを歴史の中に位置づけます。そこにおいて、イスラエルはたびたび恵み深くいつくしみに満ちている神の力、神の忠実さ、神のみ摂理を体験しました。特に、御自分の民に対する神の愛が、これほど明らかで印象的な方法で流刑から彼らを解放してくださったことにおいて再び現れたため、預言者はそれを証しするために「国々からのがれて来た者」を招いています。神は、民に向かって、もしできるなら、語り合おうではないか、と招きます。「正義の神、救いをもたらす者は、わたしをおいてほかにはいない」(イザヤ 45:20)。この預言は、イスラエルに対する神の介入には議論の余地がないということを述べて終わっています。

それから、偉大な普遍的救済論が導き出されます。神は宣言なさいます。「地の果てに至るすべての者よ、わたしにたちもどり救いを得よ。わたしは神、ほかにはいない」(イザヤ 45:22)。神が御自分の民であるイスラエルに示されたご好意は排他的なものではなく、かえって、全人類がその恩恵に与るようにと定められている愛のみ業であったことが、明らかになります。

こうして、私たちは、旧約におけるアブラハムの子孫、それに続く教会におけるキリ

ストの弟子たちの特別な選びの中に輪郭が描き出されている救いの歴史の秘跡的概念を見て、閉じられた排他的な意味での特権としてではなく、普遍的愛のしるしと道具を見出すのです。

5, 礼拝への招きと救いの申し出はすべての人々に向けられています。「すべてのひざは私にかがみ、すべての舌は私を崇める」（イザヤ 45:23）。キリスト教的視点からこれらの言葉を読むことは、「すべての名に勝る名」キリストに焦点を当てる、新約の完全な啓示に思いをはせることです。「天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもの、すべてのひざはイエズスのみ名にひざをかがめ、すべての舌は、父である神の栄光のために、イエズス・キリストは主であると宣言する」（フィリピ 2:10-11）のです。

この賛歌を通して、私たちの朝の賛美は普遍的な次元へと広がり、いまだキリストを知る恵みに与っていない人々の名において語ります。この賛歌は、神はイエズスの内に世界の救い主として御自分を啓示されたということを宣言しながら、地球の隅々にまで旅立っていく「宣教師」とならせてくれるのです。

第 1 週　金曜日　朝課　第 3 唱和

詩編 100

1, イスラエルの伝統は、ただ今私たちが拝聴した賛美の賛歌に「todah のための詩編」というタイトルを与えています。これは、典礼的な合唱による感謝です。そのようなわけで、この詩編が朝の祈りの中で響き渡るのが相応しいのです。この 4 節の喜びに満ちた賛歌の中に、祈りにおいて用いることでキリスト教共同体に霊的な実りをもたらしてくれる 3 つの注目に値する要素を見分けることができます。

2, 何よりもまず、明らかに典礼的次元について記述されている、祈りなさい、という切迫した呼びかけがあります。詩編の中に音節ごとに分けられた典礼的な使用法の指示によって組み合わされている命令形の動詞を並べるだけで十分でしょう。「喜びの声をあげ、…歓呼の歌を歌いつつ、み前に進み、喜んで神に仕えよ。主こそ、神であると悟れ。…感謝に満ちて門をくぐり、賛美を歌って中庭にはいる。神に感謝をささげて、その名をたたえよう。」これは、ただ単に、門をくぐり中庭を通って神殿の聖所に入りなさい、という招きではなく、喜びに溢れて神を賛美するようにという招きでもあります。

これは、信仰と愛の絶え間ない宣言によって縒り合わされた断ち切られることのない賛美の糸のようです。賛美は、この地上から神に向かって立ち昇っていくのと同時に、信じる者たちの霊を養うのです。

3, 私は、この賛歌の初めにおかれている第２の項目に焦点を当てたいと思います。そこでは、詩編作者が、神に喜びの声をあげるように、と全地に向かって呼びかけています（詩編 100:1 参照）。確かに、この詩編は選ばれた民に注意を向けてはいますが、「王である主に対する賛美」を伴う詩編（詩編 96-99 参照）と同様に、この賛美の視点は普遍的です。世界と歴史は、偶然の恵み、混沌、盲目的な必要性にあるのではありません。人類が正義と信頼関係に従って安定した生活をおくることを求めてくださっている、神

秘の神がこの世界と歴史とを治めておられるのです。この神は「すべての者の王、神は大地の基を固め、わけへだてなく民をさばかれる。神は来られる、世界をさばきに来られる。正義とまことをもってすべての民をさばかれる」(詩編 96:10, 13)。

4, 私たちは、主であり王、父であり創造主である神のみ手の内にあります。私たちはこのことを祝い、神は御自分の御手から私たちを落とすことはないと確信しています。この光の内に、この詩編の第３の中心的な要素についてより良く評価することができます。詩編作者が私たちの唇にのせる賛美の中心には、神の意味深い現実を定義付けている一連の属性によって表現されている信仰の宣言があります。この本質的な信仰の宣言には、それに続く次のような諸々の証言が含まれています。「主こそ神であると悟れ。神はわたしたちを造られた。わたしたちは神のもの、その民、…神はいつくしみ深く、そのあわれみは限りなく、そのまことは代々に及ぶ」(詩編 100:3-5)。

5, 最初の部分には、『わたしはあなたの神である主。…わたしのほか誰をも神としてはならない」(出エジプト 20:2, 3)。という十戒の第１の命令が要求している通り、唯一の神に対する新たな信仰の宣言があります。聖書の中でたびたび繰り返されている通りです。「知りなさい。今日、あなたの心によく記しておきなさい。上は天において、下は地において、主は神であり、他に神のないことを」(申命記 4:39)。こうして、創造主である神への信仰は、存在と生命の根源として宣言されました。「契約形式の文書」によって表現されていますが、イスラエルが神によって選ばれていることを確認する証言となっています。「わたしたちは神のもの、その民、その牧場の羊」(詩編 100:3)。自分たちは、魂の卓越した羊飼いが天の永遠の牧場に導いてくださる群である、という意識をもって、新しい神の民の忠実さが確かなものとされます。

6, 創造主であり契約の源泉である唯一の神という宣言の後、私たちの詩編作者が歌い上げる主のお姿は、詩編がたびたび称揚している神の 3 つの性質です。すなわち、神の善性、いつくしみ深い愛(hesed)、忠実さです。これらは、神がその民と結ばれた契約に属する 3 つの徳です。この 3 つの徳は、諸々の罪、反抗、人間の不忠実にも関わらず、世代を通じて、決して破られることのない絆を表現しています。消え去ることのない神の愛に対する曇りない信頼によって、神の民は自分たちの日々の試練や弱さを担いながら歴史の中を旅していくのです。

この信頼は、ひとつの賛歌となります。そのために、聖アウグスチヌスが解説している通り、時には、言葉は力を失うこともあります。「愛徳が増せば増すほど、あなたが言ったことと言わなかったこととが意識できるようになります。事実、そのものの味わいが確かなものとなる以前には、神について語るために言葉を用いることができると考えていました。その味わいを楽しみ始めた時、自分が味わっているものを十分に説明することができないということを認識しました。自分が味わっているものをどのようにして言葉で表現したらよいのか分からないなら、そのために、黙ったまま賛美しなくてよいというのでしょうか?決してそうではありません。あなたはそんなに恩知らずではないはずです。主に向かってほまれ、尊敬、最高の賛美をお捧げすべきです。詩編に耳を傾けなさい。『世界よ、神に喜びの声をあげよ。』こうして、あなたが主のみ前で喜ぶなら、全地の喜びを理解できるでしょう」(「詩編講話」より)。

第3週　土曜日　朝課　第1唱和

詩編119:145-152

1, 朝の祈りが差し出す詩編をたどる私たちの旅もずいぶん長いものとなり、はっきりとしたひとつの区切りにやってきました。詩編の中でもっとも長い祈りである詩編119です。大きなアルファベットの祈りの一部分で、第19編にあたる部分です。詩編作者はその作品を22に区切っています。ヘブライ語の22のアルファベットの文字順に対応しています。各区切りは8つの節を持っており、各節の最初の文字はアルファベット順になっています。

ただ今私たちが拝聴いたしましたのは、神への信仰と祈りの熱心な生活を表現している祈る人を描く、‘qôf’というヘブライ語の文字で始まることによってしるしを付けられている区切りの部分です(詩編119:145-152参照)。

2,主への嘆願は休みなく続きます。なぜなら、神のみ言葉についての普遍の教えに対する応答であるからです。事実、一方では、この祈りの中で用いられている動詞は、増えていきます。「心をこめて叫ぶ」、「あなたに叫ぶ」、「呼び求める」「答えてください」。一方では、詩編作者は、神のおきて、さとし、ことば、希望、さばき、仰せ、教え、すすめを差し出してくれる主のみ言葉を称揚します。これらすべてが一緒になって、詩編作者の信仰と確信にとって方角を示す目印となる北極星を形作っているかのようです。祈りは、夜明けの最初のほのかな光を前にした夜に始まる対話のように表され（詩編119:147参照)、日中、特に生活の中の逆境、試練の時にも続きます。事実、地平線は闇と嵐です。「悪意に満ちて私を襲う者が来る。彼らはあなたの教えから離れている」(詩編119:150)。しかし祈っている人は確信に満ちています。神が、み言葉と恵みをもってそばにおられるのです。「神よ、あなたは私の近くにおられ」(詩編119:151)、迫害者の手に義人を売り渡すようなことはなさいません。

3,ここで私たちの黙想を、詩編 119 のこの部分の単純ではあっても鋭いメッセージ、それは一日の始まりのために役立つメッセージですが、その概略を示しながら、この詩編119について解説している偉大な教会の教父聖アンブロジウスへと、向かわせたいと思います。彼は今拝聴した箇所の解説に44もの段落を捧げています。

朝早くから神を賛美して歌うようにという理想的な招きを取り上げながら、特に147-148節について考察しています。「あかつきに目覚めて、わたしは呼び求める。…夜回りの来る前に、わたしは目覚めている。」詩編作者のこの熱心な言葉から、聖アンブロジウスは一日のすべての時間を包含する絶え間ない祈りについての考えを悟ります。「主を呼び求めるものは誰でも、主に嘆願するために捧げられた特別な時間というものの存在を知らないかのように生活すべきです。常に、祈り求める態度の内に留まるのです。食べたり飲んだりしていても、キリストを呼び求め、キリストに祈り、キリストについて語りましょう。どうかキリストがいつでも私たちの心と唇にいてくださいますように」(詩編119の解説,2:SEAM010,p.297)。

聖アンブロジウスは、朝の特定の時間について語る幾つかの節に注目してから、私たちは「日の昇る前に主に感謝を捧げる」(知恵16:28)べきであるという知恵の書の指示に言及しながら、次のように解説します。「もし昇る朝日の光線が傲慢な軽率さによっ

て怠慢にもベッドの中に横になっているあなたを驚かせるなら、また、もしさらに明るい光が惰眠をむさぼるあなたの寝ぼけ眼を傷つけたなら、大変なことです。すべきことのない夜の間に、わずかな信心業さえもしないまま、霊的な捧げ物もなしに、それほど長い時間を過ごすことは私たちにとって不名誉なことです」(同上 p.303)。

4,それから、聖アンブロジウスは、時課の典礼に含まれている彼の有名な賛美歌のひとつ「夜明けの時に」Aeterne rerum conditor にあるとおりに、昇る朝日を観想しながら、次のように私たちに勧告しています。「人よ、おそらく知らないのでしょう。毎日、あなた方の心と声の最初の実りを神に捧げなければならないということを。毎日が収穫の時なのです。ですから、昇る朝日にお会いするために走りなさい。…義の太陽は、楽しみに待っていてもらうことを望んでおられます。それ以外に何も期待しておられません。太陽よりも早く起きるなら、あなたの光としてキリストを受けるでしょう。彼ご自身こそは、あなたの心の深みを照らす最初の光なのです。あなたが神のみ言葉について黙想するなら、夜明けの光をお作りになる御方は、夜の時間にあなたを照らしてくださるでしょう。黙想している間に光が上るのです。朝早く、急いで、あなたの信心の最初の実りを尊敬をもって教会へと運びなさい。それから、世の思い煩いがあなたを呼ぶなら、次のように言うことに何も優先させてはなりません。『あなたの仰せを思い巡らし、夜回りの来る前に私は目覚めている』。そうすれば、あなたは良い意向をもって、あなたの思い煩いに携わることになります。たくさんの賛美歌と歌、福音で読んだ幸いの数々によって一日を始めることは、何と美しいのでしょう。神の祝福にふさわしいことを感じさせてくれるものを自分の内に保とうとするなら、主のみ言葉が、祝福となってあなたの上に降り、あなたが歌ったとおりに、主の祝福を繰り返し、徳を実行する必要性に留まらせてくれるとは、なんと頼もしいのでしょうか」(同上 p.303,309,311,313)。

さぁ、聖アンブロジウスの呼びかけに答え、朝ごとに、神が私たちのそばにいて、落ち着きと恵みを保障してくださるそのみ言葉によって私たちを導いてくださるようにと呼び求めながら、日々の生活、その喜びや心配事に向かって目覚めるようにいたしましょう。

第１週　土曜日　朝課　第２唱和

出エジプト

1, 第１週の土曜日の朝祈りで使われている、この勝利の賛歌(出エジプト 15:1-18)は、救いの歴史の鍵となったあの瞬間に私たちを連れて行ってくれます。脱出(出エジプト)のできごと、神が人間的には絶望的な状況からイスラエルを救い出してくださった時のことです。この事実はよく知られています。エジプトでの長い奴隷状態の時代の後で、約束の地に向かう道の途上、ファラオの軍隊が追い迫り、神がその力あるみ手をもって介入して下さらない限り、全滅の危機からヘブライ人を救ってくれるものは何もなかったのです。この賛歌は喜んで、武装した敵の暴虐な計画を描写しています。「追いかけて、追いつこう。かれらのものを取げて、ぶんどり品を分けよう。剣を抜いて、この手

で滅ぼそう」(出エジプト 15:9)。
　最も偉大な軍隊であっても神の全能に敵対して何ができましょう。神は海に命じて攻撃されている民に道を開き、敵に対してその道を閉じられました。「あなたのいぶきで風が吹くと、海はかれらをおおい、大水の中に鉛のように沈んだ」(出エジプト 15:10)。
　これらは、自分たちの目を疑うほどのある民族の驚きを表現しながら神の偉大さを描写しようとする試みであり、栄光に満ちた賛美の賛歌の声によってほとばしり出た、力強い象徴です。「主はわたしの力、わたしの守り、わたしの救い。わたしはこのかたをほめたたえる。神は勇者、その名は主」(出エジプト 15:2)。
　2, この歌は、ただ、獲得された解放について歌っているのではありません。神との交わりの内に生きるために神の御住まいになる場所に入っていく、という積極的なできごとをも述べています。「あがなわれた民にいつくしみの手を伸べ、力強く、とうといすまいに導かれた」(出エジプト 15:13)。ですからこのできごとは神と民との間の契約を基礎にしているだけではなく、救いの歴史全体の「象徴」となっていると理解されました。他の多くの機会に、イスラエルは同じような状況のもとで生き残り、脱出はいつも繰り返されることになるのです。特別な方法で、あのできごとは、キリストがその死と復活によって成し遂げてくださった偉大な贖いのできごとの前表となっています。
　この理由から、この賛歌は、キリストの身に起こったことを強烈な比喩的描写によって現すために復活徹夜祭の典礼の中で特別な方法で響き渡ります。キリストにおいて、私たちは、人間の圧政者からではなく、原初から人間の運命にのしかかっていたサタンと罪への隷属から救われました。キリストと共に、人類は御父の家へと導く小道を再び歩み始めたのです。
　3, この解放は、すでに神秘的に成し遂げられ、成長していくようにと予め定められていた生命の種子として洗礼の内に現存し、時の終わりにその完成に達することになっています。その時、キリストは、栄光の内に再臨し、御父にみ国をお返しになる」(コロサイ 15:24)のです。それが、この結末であり、黙示録の引用によってこの賛歌を紹介する時に、時課の典礼は終末的な地平線を探すようにと私たちを招きます。「彼らは獣に打ち勝った。…彼らは神のしもべモーセの歌を歌っていた」(黙示録 15:2-3)。
　時の終わりには、脱出(出エジプト)というできごとが前もって現している事柄と、復活というできごとが決定的な仕方で成し遂げて今も将来に向かって開かれている事柄とが、救われたすべての人々のために完全に実現されることでしょう。実際、私たちの救いは、現実であり全体に及んでいますが、私たちの地上の状態における「すでに」と「まだ」の間に置かれています。聖パウロが思い出させてくれる通りです。「私たちは救われているという希望の内にあります(ローマ 8:24)」。
4, 「神をたたえよう、神は栄光を現し、馬と戦車を海に投げ入れられた」(出エジプト 15:1)。昔の賛歌の言葉を私たちの唇に乗せながら、朝の祈りは、私たちの時代を、偉大な救いの歴史の地平線の中にあるものとして見るようにと招いています。これこそ時の流れを識別するキリスト教的方法です。積み重ねられた過去の日々において、私たちを虐げる運命はないこと、かえって、開かれつつある一つの計画、私たちの時代のできごとの中に識別をもって読み取ることを学ぶべき一つの計画があるのです。
　教会の教父たちは、特にこの見方に同調していました。実際、救いの歴史から始める

ことに意味を見出していた教父たちは、旧約の顕著なできごとの「原型」としての価値を認めながら、将来のできごとの「前表」として、ノアの時代の大洪水からアブラハムへの招きへ、あるいは脱出(出エジプト)の解放からバビロン追放後のヘブライ人たちの帰還へと読んでいくことを好んでいました。これらのできごとの中に、人間の歴史の道程の全体にわたって、何らかの方法で繰り返されていくであろう基本的な特徴が予め述べられていたのです。

5, 預言者たちはどうかと言えば、彼らはすでに、救いの歴史の出来事が、いかに目の前の現実に影響を及ぼしているかを示し、将来の完全な実現を指し示しながら、それらのできごとを読み直しています。神がイスラエルと結んだ契約の神秘を黙想しながら、預言者たちは、すでに「新しい契約」について語り始めていたのです(エレミア 31:31, エゼキエル 36:26-27 参照)。そこでは、神の掟は人の心の中に書かれることになるのです。預言の中に、キリストの御血によって封印され、聖霊の賜物によって現実のものとなった新しい契約を見出すのはたやすいことです。この昔の脱出の勝利の賛歌を唱えることによって、今、復活の脱出の完全な光によって、信者は、天のエルサレムに向かって旅する巡礼者である教会として、喜びをもって生きることができます。

6, 私たちは、驚きを増し加えつつ、神が御自分の民のために成し遂げてくださったことを観想することができます。「あなたは民を導いてあなたの山に植えられる。神よ、その山はあなたの造られたとうといすまい。あなたの手で建てられた聖所。」(出エジプト 15:17)。勝利の賛歌は人間の勝利ではなく神の勝利を歌います。これは、戦いの歌ではなく、愛の歌なのです。

昔のヘブライ人たちの感動的な賛美が私たちの時代にしみこんでいくことを意識しながら、脅迫と危険、苦しみに満ちているにもかかわらず、神のいつくしみ深い眼差しに包まれているという確信を抱きながら、私たちはこの世界のさまざまな道を歩んでいくのです。神の愛の力には、何ものも抗うことはできないのです。

第１土曜日　朝課　第３唱和

詩編 117

1, これは、最も短い詩編です。ヘブライ語では、たった 17 の言葉でできていますが、そのうちの 9 つは注目に値します。これは、短い栄光の賛歌であり、本質的な賛美の賛歌です。数ある長い詩編のまとめとして、理想的な機能を果たしています。各詩編唱和の最後に「栄光は父と…」を唱えるように、このようなことは、典礼において時々起こることです。

実際、この祈りのわずかな言葉は、普遍的立場の視点から、主と御自分の民との契約を高らかに述べるために意味深いものと見なされています。この光の中で、使徒パウロはこの詩編の最初の一節を用いて、神に栄光を帰するようにと世界の諸国民を招いています。実際、彼はローマのキリスト者に宛てて次のように書いています。「次のように書かれている通り、異邦人は神のいつくしみの故に神に栄光を帰するようになるでしょ

う。『すべての国よ、神をたたえ、すべての民よ、神をほめよ』」（ローマ 15:9, 11）。

2, この種の詩編にたびたび起こることですが、今私たちが黙想している短い賛歌はイスラエルだけでなく、地上のすべての民に向けられている招きへと開かれています。アレルヤは、誠実な心をもって神を捜し求め愛するすべての義人の心からほとばしり出るのです。この詩編は、キリストより 6 世紀さかのぼるバビロン捕囚の間にイスラエルが体験したことに養われた、広大な視野による展望を、再び、思い巡らしています。この時代、ヘブライ人は、他の国民、文化に出会い、自分たちがそこで生活していた土地の人々に自分たちの信仰を宣言する必要性を感じていました。この詩編は、多くの場所で素晴らしく花咲き、主であり造り主である方に向けることのできる、ある概念を描写しています。

つまり、起源も歴史も文化も異なる諸民族を一つに包含する「エキュメニズム」の祈りについて語っているのです。「終わりの日」、すべての国の民の行列が「主の家の山」に向かってくる、と描写しているイザヤの偉大な「展望」に一致しています。こうして、剣と槍は彼らの手から落ち、彼らは剣を鋤に、槍を耕作用の三極に打ち直し、すべての人にとっての唯一の主にその賛美の歌を歌いつつ、主のみ言葉に耳を傾け、その掟を守りながら、人類は平和の内に生活できるようになるのです(イザヤ 2:1-5 参照)。

3, この普遍的地平線において、選ばれた民イスラエルには、成し遂げなければならない使命があります。主との契約を生きながら経験してきた２つの偉大な神の力を述べ伝えることです(詩編 117:2 参照)。この２つの力は、ニッサの聖グレゴリオが述べている通り、神の御顔、神の「善良な二項式」の基本的な特徴であり(『詩編の表題に関して』参照)、ヘブライ語の別な言葉によって表現されるのですが、このヘブライ語は、翻訳によってはとてもその意味の完全な豊かさを伝え切れません。

最初の言葉は「hesed」で、詩編の中で繰り返し用いられている言葉です。私はそれについて以前ご説明申し上げたことがあります。「hesed」は、信頼に値する継続的な絆によって結ばれている２人の人の間に生じる感情です。それは、愛、忠実さ、いつくしみ、善良さ、優しさのような諸価値を包含しています。神と私たちの間には、皇帝と家臣の間にあるような冷たい関係ではなく、２人の友人の間、あるいは夫婦や親子の間にあるような生き生きとした関係があるのです。

4, 第２の言葉は、「emeth」で、最初の言葉の同義語です。この言葉は詩編の中で愛されている言葉です。旧約聖書で使用されている半数は詩編の中にあります。

この言葉自体は、「まこと」、すなわち、ある関係における誠実さ、妨害や試練にもかかわらず信頼のおける忠実さ、裏切りを知らぬ純粋な喜びに満ちた忠実さを表現しています。詩編作者がこの「emeth」は「世々におよぶ(詩編 117:2)」と宣言しているのは偶然ではありません。神の真実な愛は、誤ることはなく、私たちを、自分自身の暗闇や虚無主義の暗闇、あるいは見通しのない運命論、空虚さや死に打ち捨てておくことはありません。

神は、無償で不断で終わることのない愛をもって、私たちを愛してくださっているのです。これが、心から湧き上がる祈りのため息の余でありながら、偉大な歌のように情熱的なこの詩編のメッセージなのです。

5, このメッセージが指し示している言葉は、あらゆる言語、民族、国家の大群衆が、

神と子羊の玉座の前で神の栄光を歌っている(黙示録7:9参照)天のエルサレムに響きわたっている歌のこだまに似ています。旅する教会は、たびたび才気ある詩人や音楽家の作品に伴われて、終わることのない賛美の表現によってこの歌に合流します。例えば、何世紀にも渡って、幾世代ものキリスト者たちが賛美と感謝のために用いてきた Te Deum を思いつきます。「すべてのものの主、神よ、あなたをたたえて歌う、永遠の父よ、世界はあなたをあがめとうとぶ」。この部分にとって、今日、私たちが黙想している短い詩編は、キリスト御自身が御父に捧げられた完全な賛美に自らを一致させながら世界の中にあってその声をあげる教会の、絶えることのない典礼による賛美と共に、効果的な統合をなしています。

主を賛美しましょう!絶え間なく主を賛美しましょう。しかし、私たちの生活こそ、言葉以上に私たちの賛美の表現とならなければなりません。この詩編によって主に栄光を帰するようにと人々を招くのなら、私たちは本当に信頼に値するものとならなければなりません。そうでなければ主の戒めを真剣に受け取らなかったことになってしまいます。「人々の前にあなた方の光を輝かせなさい。そうすれば、人々はあなた方の良い業を見て、天におられるあなた方の御父に栄光を帰するであろう」(マタイ 5:16)。主を賛美する詩編のすべてと同様に、詩編 117 を歌いながら、神の民である教会は、自らがひとつの賛美の賛歌となるよう努力しています。